

文部科学省委託事業

平成 26 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業

成果報告書

高知県の教員スタンダードを活用・発展させた
教員養成カリキュラムの開発

平成 27 年 3 月

高知大学教育学部

目 次

第1章	本研究の概要-----	1
第2章	調査研究Ⅰ 高知県の教員スタンダードの視点による 高知大学の教員養成カリキュラムの検証・再構成 -----	3
第3章	調査研究Ⅱ 高知県教育委員会との連携・協働による 県内教員就職者への継続的・体系的なフォローアップシ ステムの構築に向けた検討-----	50
資料		
	・ 高知県教員スタンダード（リーフレット）	

第1章 本研究の概要

<本章の構成>

1. 課題認識
2. 実施体制

1. 課題認識

現在、大学の教職課程については、さまざまな課題が指摘されている。例えば、教員養成に対する明確な理念（現代社会で養成することが求められる教員像）の追求・確立がなされていない、科目間の連続性・整合性が図られていない、学校現場のニーズに必ずしも十分に対応していない等々が挙げられる。こうした課題は、「大学の教職課程において保証する資質・能力と、今日の学校現場や社会が求める資質能力との乖離」として捉えることができる。教員養成機関に課されている課題は、教育現場において具体的に求められている教師像の形成とそうした教員の養成を具現化するカリキュラムの開発である。教員養成のディプロマポリシー（DP）・カリキュラムポリシー（CP）が明確な教育哲学に基づく方針のもとに明示され、各学年進行における力量形成のステップが構築されると共に、それらのカリキュラムもまた不断に検証される必要がある。

さらに、大学の教職課程には地元のニーズに基づいた教員養成が求められている。そうした要請に応えるための改革・改善はDPとの整合性を保ちつつ教職課程全体にわたってなされる必要があるが、その着手の際の足がかり（出発点）になるのは「教職実践演習」である。

「教職実践演習」は、最終的に“養成段階で修得すべき地元のニーズに基づいた最小限必要な資質能力”が身に付いていることを確認する、あるいは身に付いていなければその点を補い、定着させる授業である。上述の乖離の克服は、まずは、この「教職実践演習」がその本来的機能を果たし得ているか否かにかかっている。

また、中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（平成24年8月）では、大学での養成と教育委員会による研修が分断されており、教員が大学卒業後も学びを継続する体制が不十分であるという現状が指摘されている。こうした課題に対して、教職生活全体にわたって学びを継続する意欲を持ち続け学部教育から卒後研修にかかるシームレスな教員力育成の仕組みを構築する必要があると考える。こうした課題をふまえるならば、大学において教員養成に注力するのはもちろんのこと、それと連動した大学卒業後の教職キャリア形成支援体制の構築が不可欠である。また、大学卒業後を視野に入れた教員養成カリキュラムの構築は、ひいては、学部教育と採用・研修との連結をより緻密なものとすると考えられる。

本学においては、教員養成カリキュラムの充実に向けた取り組みを進めているほか、地域貢献の観点から、学校における諸課題の解決に向けた支援にも注力しているところである。これらの取り組みを「生涯学び続ける教員を支援する仕組みづくり」という観点から、再検討し、継続的な教職キャリア形成のためのフォローアップシステムを再構築する必要がある。また、ここで言うフォローアップシステムとは、個々の卒業生に対する個別支援にとどまるものではなく、卒業生同士のネットワーク構築を含むものとして構想している。こうした取り組みを教育委員会との連携・協働によって行うことにより、中・長期的な視野に立った教職キャリア支援体制を構築し、高知県における教員の養成・採用・研修の一体化を具現化することが可能となる。

2. 実施体制

所属部署・職名	氏名	役割分担
教育学部・学部長	藤田 詠司	事業実施責任者
教育事務室・室長	小松 俊彦	事務連絡担当
教育学部・教授 (附属教育実践総合センター長兼務)	赤松 直	全体総括
教育学部・副学部長	小島 郷子	調査研究(1)担当
教育学部・副学部長	中野 俊幸	調査研究(2)担当
教育学部・教授	岡谷 英明	調査研究(2)担当
教育学部・准教授	柳林 信彦	調査研究(1)担当
教育学部附属教育実践総合センター・講師	島田 希	調査研究(2)担当
教育学部附属教育実践総合センター・講師	横山 卓	調査研究(1)担当
教育学部附属教育実践総合センター・准教授	古口 高志	調査研究(2)担当
教育学部附属教育実践総合センター・准教授	田邊 重任	調査研究(1)担当
教育学部附属教育実践総合センター・准教授	鹿嶋 真弓	調査研究(1)担当
教育学部・講師	草場 実	調査研究(2)担当
高知県教育センター・所長	下司 眞由美	調査研究(2)担当
高知県教育センター・企画調整担当チーフ	刈谷 直文	調査研究(1)担当
高知県教育センター・研究開発担当チーフ	武市 綾香	調査研究(1)担当
高知県教育センター・若年研修担当チーフ	竹内 満	調査研究(2)担当

(第1章 赤松 直)

第2章 調査研究Ⅰ 高知県の教員スタンダードの視点による高知大学の教員養成カリキュラムの検証・再構成

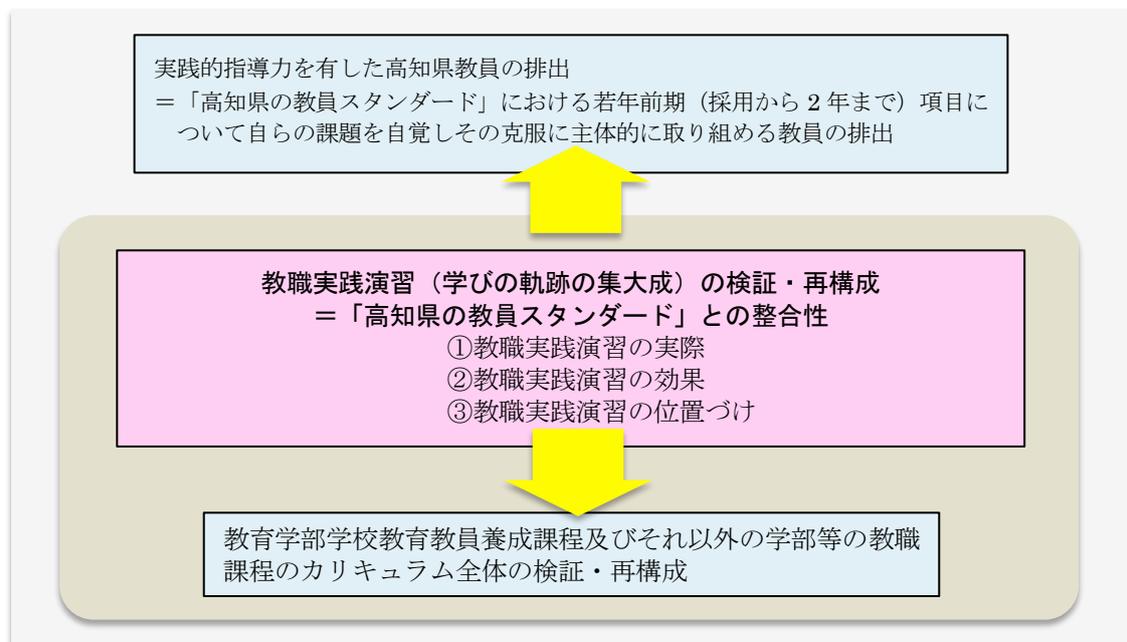
<本章の構成>

- | | |
|------------------|----------------------------|
| 1. 調査研究の目的 | 7. 調査結果 |
| 2. 目的達成のための考え方 | 【A】教職実践演習はどのように遂行されているのか？ |
| 3. 調査研究の目標 | 【A-1】授業担当教員作成のシラバス |
| 4. データ収集の方法 | 【A-2】授業担当教員に対するアンケート調査 |
| 5. 本学で取得可能な教員免許状 | 【A-3】受講学生作成の発表資料 |
| 6. 高知県の教員スタンダード | 【B】教職実践演習はどのような効果をあげているのか？ |
| | 【B-1】受講学生に対するアンケート調査 |
| | 【C】教職実践演習はどのように捉えられているのか？ |
| | 【C-1】現場教員に対する面接聴取調査 |
| | 8. 教職実践演習の再構成に向けて |

1. 調査研究の目的

本調査研究の目的は、その本来の目的及び高知県教員スタンダードの視点から、高知大学の「教職実践演習」を検証し、再構成のための手がかりを得ることにある。

2. 目的達成のための考え方



(1) ミッションの再定義結果には、「高知大学の教員養成分野は、高知県教育委員会等との連携により、地域密接型を目指す大学として、義務教育諸学校に関する地域の教員養成機

能の中心的役割を担うとともに、高知県における教育研究や社会貢献活動等を通じて我が国の教育の発展・向上に寄与することを基本的な目標とし、実践型教員養成機能への質的転換を図るものとする」との記載がある (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/12/18/1342091_17.pdf)

(2) 同じくミッションの再定義結果には、「卒業生に占める教員就職率は現在 62%であり、高知県における小学校教員採用の占有率について、現状は 24%であるが、第 2 期中期目標期間における入試改革やカリキュラム改革、キャリア支援改革を行いつつ、占有率について第 3 期中期目標期間中には 35%を達成する。さらに、医療や看護、防災、環境、国際などの分野において教員養成に関する大学全体の機能を活用するなど、総合大学の特性を活かして、高知県における中学校教員採用の占有率の平均(平成 22 年度～24 年度) 35%から、第 2 期中期目標期間における改革を行いつつ、第 3 期中期 目標期間中には 40%を達成する」との記載がある (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/12/18/1342091_17.pdf)

実践的指導力を有した高知県教員を排出していくことが本学のミッションである

(3) 平成 25 年度に高知県より「高知県の教員スタンダード」が提出された。これは高知県の教員が、採用後から 10 年終了までに身に付けるべき到達目標(自己の資質能力の向上を図るための指標)であり、4 領域 8 能力 50 項目から構成されている。なお、この 50 項目は、若年前期(採用から 2 年まで)、若年後期(3 年から 5 年まで)、10 年(6 年から 10 年まで)の 3 段階に区分・体系化されている (http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/files/2014030500025/2014030500025_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_life_103410_392240_misc.pdf#search=高知県教員スタンダード)

本学が排出する実践的指導力を有した高知県教員とは、すなわち、まずもって「高知県の教員スタンダード」における若年前期(採用から 2 年まで)に設定された項目について自らの課題を自覚できその克服に主体的に取り組める教員だということになる

(4) 平成 22 年度入学生から必修化されている「教職実践演習」は、「教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される」(http://www.mext.go.jp/b_men)

- ◆卒業前に「高知県の教員スタンダード」における若年前期（採用から2年まで）に設定された項目について自らの課題を自覚できているか否かを確認し、必要に応じて補完・定着を図るのは「教職実践演習」においてである
- ◆教員養成カリキュラムの開発（検証・再構成）にあたっては、まず、①教職実践演習の検証・再構成を行い、それに基づいて②カリキュラム全体の検証・再構成を行うという順序が妥当であろう
- ◆本調査研究は、①教職実践演習の検証・再構成を主たる目的としている

3. 調査研究の目標

本学における教員養成は、教育学部学校教育教員養成課程（以下、学教とすることがある）ならびに同課程以外（教育学部生涯教育課程、人文学部、理学部、農学部、医学部）の教職課程（以下、全学とすることがある）において行われている。教職実践演習について本調査研究で明らかにする事項及びデータ蒐集の方法は、下表のとおりである

教職実践演習の検証・再構成	
明らかにする事項	データ蒐集の方法
【A】教職実践演習はどのように遂行されているのか？	①授業担当教員作成のシラバスの蒐集 ②授業担当教員に対するアンケート調査・面接聴取調査の実施 ③受講学生作成の「発表会資料」の蒐集
【B】教職実践演習はどのような効果をあげているのか？	受講学生に対するアンケート調査の実施
【C】教職実践演習はどのように捉えられているのか？	受講経験のある現場教員に対する面接聴取調査の実施

※発表会資料：「教職実践演習において補完・定着を目指す自己課題」及びその補完・定着のプロセスが報告される発表会の資料（授業最終回に開催される）

4. データ蒐集の具体的な段取り

データ蒐集の具体的な段取りをまとめると、次のようになる。

教育学部学校教育教員養成課程（学教）における教職実践演習について	
データ収集の方法	具体的な段取り
学教【A】①	学務委員会を經由して蒐集
学教【A】②	2月26日（金）15:00～16:00 本学にて授業担当教員1名に面接聴取して蒐集
学教【A】③	学務委員会を經由して蒐集
学教【B】	12月：受講学生に対するアンケート調査を実施（授業担当教員）して蒐集
学教【C】	未実施

教育学部学校教育教員養成課程以外（全学）における教職実践演習について	
データ収集の方法	具体的な段取り
開放【A】①	教職実践演習を運営する資格教育委員会教職実践演習アドホック部会を經由して蒐集
開放【A】②	1月 授業担当教員にアンケート調査（メールによる配信・回収）を実施して蒐集
開放【A】③	授業担当教員を經由して蒐集
開放【B】	12月 受講学生に対するアンケート調査を実施（実施は授業担当教員）して蒐集
開放【C】	10月25日（土）10:00～11:30 本学にて1名に面接聴取して蒐集 10月27日（月）17:30～18:30 勤務校にて1名に面接聴取して蒐集

5. 本学で取得可能な教員免許状

学部	学科・課程	取得免許状
人文学部	人間文化学科	中学校教諭一種（国語・社会・英語）
		高等学校教諭一種（国語・地理歴史・公民・英語）
	国際社会コミュニケーション学科	中学校教諭一種（社会・英語）
		高等学校教諭一種（公民・英語）
	社会経済学科	中学校教諭一種（社会）
		高等学校教諭一種（公民・商業）
教育学部	学校教育教員養成課程（学教）	小学校教諭一種【要卒】
		中学校教諭二種又は特別支援学校教諭一種【要卒】
		幼稚園教諭一種
		中学校教諭一種（国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健体育・技術・家庭・英語）
		高等学校教諭一種（国語・地理歴史・公民・数学・理科・音楽・美術・書道・保健体育・家庭・英語）
		特別支援学校教諭一種
	生涯教育課程	中学校教諭一種（音楽・美術・保健体育・家庭・理科）
		高等学校教諭一種（音楽・美術・保健体育・家庭・理科）
理学部	理学科	中学校教諭一種（数学）
		高等学校教諭一種（数学）
		中学校教諭一種（理科）
		高等学校教諭一種（理科）
	応用理学科	中学校教諭一種（理科）
		高等学校教諭一種（情報）
医学部	看護学科	高等学校教諭一種（看護）
		養護教諭一種
農学部	農学科	中学校教諭一種（理科）
		高等学校教諭一種（理科・農業・水産）

6. 高知県の教員スタンダード

4領域	8能力	番号	到達目標	若年前期	若年後期	10年
1. 学級・HR経営力	集団を高める力	1	児童生徒の実態に応じた、よりよい人間関係づくりや集団づくりを理解することができる。			
		2	児童生徒のよさを認め、児童生徒が安心・安全に過ごせる温かい学級・ホームルームづくりに取り組むことができる。			
		3	児童生徒との関わりの重要性を理解し、積極的にコミュニケーションを図ることができる。			
		4	児童生徒に公平かつ受容的・共感的に関わることができる。			
		5	学校教育目標を理解し、その実現に向けた学級経営案やホームルーム計画を立てることができる。			
		6	不登校やいじめなどの教育課題について理解し、その予防・解決に取り組むことができる。			
	一人一人の能力を高める力	7	自尊感情を育むための手立てについて理解し、児童生徒の自己肯定感を高める取組を行うことができる。			
		8	教職員や家庭・地域と連携しながら、開かれた学級・ホームルーム経営を進めることができる。			
		9	児童生徒一人一人のよさを見取り、学校生活や学習に対する意欲や興味・関心を引き出すことができる。			
		10	個々の生徒指導上の課題について、その予防・解決に向けた適切な指導・支援を行うことができる。			
		11	児童生徒一人一人の心身の特性や状況、生活環境などを多面的に捉え、個に応じた指導・支援を行うことができる。			
		12	児童生徒の自己実現や将来の夢に向けて、個に応じた適切な働きかけを継続的に行うことができる。			
2. 学習指導力	授業実践・改善力	13	年間指導計画に位置付けられている教材の価値を捉え、教材研究を行うことができる。			
		14	学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえ、学習指導案を作成することができる。			
		15	発問や板書、机間指導を効果的に用いて、授業のねらいに応じた指導を行うことができる。			
		16	学習指導案や日々の授業計画に基づき、授業を実践することができる。			
		17	学校目標を踏まえ、具体的な教育活動を示した年間指導計画を作成することができる。			
		18	授業の見方・観点について理解し、自他の授業分析から目標の達成に向けた授業を実践することができる。			
	専門性探究力	19	問題解決的な学習の在り方について理解し、自ら学び考える力の育成を目指した授業を実践することができる。			
		20	学習評価の在り方を理解し、評価規準を用いて児童生徒の学習状況を把握することができる。			
		21	P D C A サイクルを生かした学習指導について理解し、指導方法の工夫・改善を行うことができる。			
		22	専門書等で知識を得たり、県内外の研修等に参加したりすることで、専門的知識・技能を習得することができる。			
23	今日的な教育の動向を把握し、求められる専門性を追究することができる。					
24	教科における自校の教育課題を分析・考察し、学力の定着・向上に取り組むことができる。					
25	自ら学び考える力の育成を目指し、指導方法や指導技術を高めることができる。					
26	確かな学力の向上を目指し、児童生徒の実態に応じた創意工夫した教材を開発することができる。					
3. チームマネジメント力	協働性・同僚性の構築力	27	地域の行事等に参加するなど、地域との連携を図ることができる。			
		28	同僚の授業を観戦し、そこから見える成果や課題を適切に評価し、自己の学びにつなげることができる。			
		29	同僚と協働することの意義を理解し、問題解決に向けてチームで対応することができる。			
		30	保護者や地域等との連携の必要性を理解し、円滑かつ迅速に対応することができる。			
	組織貢献力	31	学年・学校内での共通認識のもと、外部の専門機関等と連携を図ることができる。			
		32	同僚の教育実践における課題について、学び合う意欲をもって助言することができる。			
		33	組織の一員として自己の役割を自覚し、全体最適の視点から学校運営に貢献することができる。			
34	同僚の特性や強みを見取り、それらを生かしたよりよい組織づくりに貢献することができる。					
35	現状にとどまらず、よりよい組織の構築に向け、リーダーシップを発揮することができる。					
36	学校を取り巻く状況を把握・分析し、学校組織の課題を発見することができる。					
37	自校の課題に対して、職員会議等において建設的に意見を述べるることができる。					
4. セルフマネジメント力	自己管理能力	38	うまくいかないことがあっても、あきらめず前向きに対応し続けることができる。			
		39	自己のストレス解消法を見つけ、明日への活力につなげることができる。			
		40	健康的な生活習慣を維持し、自己の健康管理を行うことができる。			
		41	教育公務員として服務規律を遵守し、規範意識をもって職務に専念することができる。			
		42	言葉遣いやマナーなどの社会人としての常識を身に付けた対応ができる。			
		43	仕事とプライベートの区別をつけることができる。			
	自己変革力	44	スケジュール管理に努め、時間や提出期限等を守るすることができる。			
		45	悩みや困ったことが生じた場合等には、管理職や同僚に相談することができる。			
		46	教員としての役割を理解し、教育的視点に立った公正な判断をすることができる。			
		47	管理職や同僚等の助言を謙虚に受け止め、自分を振り返り自己の成長につなげることができる。			
		48	チャレンジ精神や向上心を持ち、常に新たなことに取り組むなど自己研鑽に努めることができる。			
		49	人権尊重の精神を理解し、多様な価値観を尊重しながら自らの人権意識を高めることができる。			
		50	社会情勢等を冷静に分析し、先見性をもって社会の変化に柔軟に対応することができる。			

※本調査研究で用いたのは若年前期の列で塗りつぶしてある項目である

※出典：高知県庁 HP (<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/standard.html>)

7. 調査結果

【A】教職実践演習はどのように遂行されているのか？

既述のとおり、教職実践演習は、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置付けられるものである。授業構成にあつては、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項という教員として求められる4つの事項を含めることが適当であり、①～④が全体として確認できるよう、適宜、さまざまな方法を組み合わせて授業を編成することが望ましいとされている (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm)。

教育学部学校教育教員養成課程（学教）の教職実践演習は、学部の学務委員会が所掌しており、授業は教科に基づいてクラス分け（国語・算数・社会・理科・道徳の5クラス）をしたうえで、教育学部の実務家教員と現場経験のある非常勤講師が1クラス1名で担当している。開講は4年次第2学期の金曜日4限（・5限）を原則とし、具体的な開講日時は授業担当教員が設定している。

教育学部学校教育教員養成課程以外（全学）の教職実践演習は、全学組織である資格教育委員会が所掌しており、その実質的な運営は、同委員会内に設置されている教職実践演習アドホック部会が担っている。授業そのものは、教科等に基づいてクラス・グループ分け（国語・社会・英語・数学・理科・音楽・美術・保健体育・家庭・養護で計14グループ）をしたうえで、教育学部の教科教育専門教員（授業担当教員A）と高知県教育センター指導主事（授業担当教員B）とが原則ペアを組んで1グループを担当している。開講は4年次第2学期の月曜日5限（・6限）を原則とし、具体的な開講日時は授業担当教員が設定している。

いずれも受講学生の卒業研究との兼ね合いで、12月中に終了するよう設定されている。

以下、本項の問いに対して、【A-1】授業担当教員作成のシラバス、【A-2】授業担当教員に対するアンケート調査、【A-3】授業最終回の発表会資料（受講学生作成）の3つの材料から検討していく。

【A-1】授業担当教員作成のシラバス

教育学部学校教育教員養成課程（以下、学教）にあつては、授業担当教員間での検討を経て、シラバスを作成し提示している。

下表のとおり、学教の教職実践演習は、模擬授業の実施、授業参観、学級経営についてのケーススタディを軸に構成されている。そして、授業の冒頭には、自己課題を明確化するための省察活動が設定されており、授業最終回には、自己課題に対する取り組みについての省

察活動が設定されている。

H26 教育学部学校教育教員養成課程（学教）教職実践演習シラバス

目標	将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を補い、その定着を図ることにより、教員として必要な資質能力を形成する
概要	学生が身に付けた教職に関する資質能力を振り返り、自己課題を自覚し、模擬授業やケーススタディ等の演習を通して課題解決を図り、実践的指導力を育成する。特に、教員として求められる以下の4点に配慮して授業を構成する。①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項 ②社会性や対人関係能力に関する事項 ③幼児児童生徒理解や学級経営に関する事項 ④教科・保育内容等の指導力に関する事項
第1回	オリエンテーション（教職実践演習趣旨、目的、履修条件。履修カルテの作成について。全体の授業構成の理解。教科等別の授業内容の確認等）
第2回	自己課題の確認・面接・ケーススタディ事例シートの作成
第3回	模擬授業Ⅰ（グループ別、資料選定、発問構成の検討、指導案作成）
第4回	模擬授業Ⅱ（グループ別、資料選定、発問構成の検討、指導案作成）
第5回	授業参観（高知市内の小中学校を訪問し授業参観）
第6回	模擬授業Ⅲ（グループ別に作成した指導案に基づく模擬授業及び事後研究）
第7回	模擬授業Ⅳ（グループ別に作成した指導案に基づく模擬授業及び事後研究）
第8回	模擬授業Ⅴ（グループ別に作成した指導案に基づく模擬授業及び事後研究）
第9回	模擬授業Ⅵ（グループ別に作成した指導案に基づく模擬授業及び事後研究）
第10回	模擬授業Ⅶ（グループ別に作成した指導案に基づく模擬授業及び事後研究）
第11回	学級経営についてのケーススタディⅠ（ケーススタディ事例シートに基づく課題解決のためのディスカッション・指導助言）
第12回	学級経営についてのケーススタディⅡ（ケーススタディ事例シートに基づく課題解決のためのディスカッション・指導助言）
第13回	学級経営についてのケーススタディⅢ（ケーススタディ事例シートに基づく課題解決のためのディスカッション・指導助言）
第14回	教職実践演習発表会（各グループ代表の発表・自己課題とその解決についての発表を中心とする）
第15回	教職実践演習発表会（各グループ代表の発表・自己課題とその解決についての発表を中心とする） 講師の講評・指導助言
必携	小学校学習指導要領解説（該当教科のもの） 中学校学習指導要領解説（該当教科のもの） 教科書（該当教科のもの）

一方、教育学部学校教育教員養成課程以外（以下、全学）においては、シラバス作成にあたって以下の手続きを踏んでいる。

- (1) 教職実践演習アドホック部会における全体枠組の検討
- (2) 授業担当教員Aに対する説明会の実施
- (3) 授業担当教員Bに対する説明会の実施
- (4) 授業担当教員によるグループ計画書（シラバス）の作成

説明会では、教職実践演習の基本方針（目的、内容、方法）、そして「高知県の教員スタンダード」について、教職実践演習アドホック部会から提示・説明を行っている。但し、グループ計画書（シラバス）の作成（授業内容の詳細・具体の作成）については、授業担当教員

が行うこととなっている。教科や学校段階によるそれぞれの事情があると考えからである。しかしながら、説明会において、以下の点を留意したうえで作成するよう依頼している。

- ・教職実践演習の目的に留意すること。授業内容の一つとして「模擬授業を実施」が考えられること。
- ・冒頭 2 コマの授業は、受講生の現段階における課題析出のための時間とすること。課題析出のプロセスについては各授業担当教員で決定すること。
- ・学級経営の時間を 2 コマ分設けること。なお、この時間はクラス・グループ分けせずに一堂に会し、高知県教育センターの指導主事の先生 2 名にご講義いただくこととなっている。
- ・最終 2 コマの授業は、課題解決のプロセスとその成果を確認するための時間とすること。確認の方法については各授業担当教員で決定すること。
- ・「高知県の教員スタンダード」、「履修カルテ」を活用しうること。

こうしたプロセスを経て作成されたグループ計画書（シラバス）は、概ね下表のとおりである。既述のとおり、グループ計画書（シラバス）の作成（授業内容の詳細・具体的作成）については授業担当教員が行うこととなっているが、教職実践演習アドホック部会が提示している留意点を踏まえて、模擬授業の実施、学級経営についての講義を軸に構成されている。そして、授業の冒頭には、自己課題を明確化するための省察活動が設定されており、授業最終回には、自己課題に対する取り組みについての省察活動が設定されている。

H26 教育学部学校教育教員養成課程以外（全学）教職実践演習シラバス

目標	将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を補い、その定着を図ることにより、教員として必要な資質能力を形成する
第 1 回～ 第 2 回	オリエンテーション、履修カルテを使った面接と自己課題の確認
第 3 回～ 第 13 回	模擬授業 但し、11/10 は「学級経営」に関する講義
第 14 回～ 第 15 回	自己課題解決の確認のための発表会
必携	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領解説（該当教科のもの） ・学習指導要領解説特別活動編 ・国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』 ・文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～』 ・教科書（該当教科のもの）

学教と全学における教職実践演習シラバス上の相違点は、次の 3 点を指摘できる。

- 1) 学級経営に関する授業時間が設けられているが、学教はケーススタディによるディスカッション 3 コマ、全学は指導主事の先生方による講義 2 コマである。
- 2) 学教には、教育現場に出向いての授業参観の時間が設けられているが、全学には設けられていない。

3) 必携物として、学教では学習指導要領解説が挙げられているが、全学ではこれに加えて、国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』、文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～』が挙げられている。

【A-2】授業担当教員に対するアンケート調査

授業担当教員作成のシラバスはあくまでも「計画」であり、実質的に授業がどのように進められたのかは、事後調査をしなければわからない。そこで、授業全 15 回が終了後に、授業担当教員に対してアンケート調査（メールにて配信・回収）ないし面接聴取調査を実施した。全学の教職実践演習については 1 月に授業担当教員 26 名（回収率 80.1%）に対してアンケート調査を実施し、学教の教職実践演習については 1 名の授業担当教員に対して面接聴取調査を実施した。調査事項は以下のとおりである（なお、アンケート用紙については後掲している）。

- (1) 教職実践演習の目的について
- (2) 授業プロセスの具体について
- (3) 含めるべき事項について
- (4) 教員スタンダードの若年前期項目について
- (5) 履修カルテの活用について
- (6) 運営について（省略）

まず、全学の教職実践演習の授業担当教員に対するアンケート調査の結果から見ていく。

(1) 教職実践演習の目的について【全学】

授業担当教員は、教職実践演習の目的をどのように理解していたのか。この点についての自由記述は、以下のとおりであった。模擬授業中心の授業構成ではあるものの、教職実践演習の目的については「4年間の教職課程の総仕上げ」との理解に基づいていることがわかる。なお、文頭・文末番号はランダムに付した対象者番号である（以下同様）。

- 【1】教職実践演習では、アクティブラーニングをイメージしたものと判断した。そして、そのイメージで講義内容を意図的に計画し、実施した
- 【3】教員免許取得のための、総仕上げの授業と位置づけています。4年前期までで学び残した事について、各自で課題を設定し、その課題解決のための授業
- 【18】教職実践演習の目的について、「教職に就くうえで、学生が自己の課題を見出し、課題解決に向けた取組をすすめる。」と理解している。アドホック部会の説明、また、教科担当教授との協議の中でそのような話があったと記憶している
- 【14】今年度の会議には出席していなかったのですが、目的については昨年度同様、教員と

しての知識技能の獲得ということで理解しています。しかし、教育センターの指導主事に求められている範囲について少し教科や担当教授によって違う面もあるので、自分のやり方でいいのか少し戸惑う部分もあります

【11】教科(専門)及び教職に関する科目を履修し、教員としての専門性を習得できているかの確認と習得できるように支援をする目的であったと思います

【6】目的についての説明が十分であったかについては、明確に記憶していない。自身の理解については、学生へのオリエンテーション資料に示されている程度である

【5】自身がアドホック部会に所属したこともあり、教職実践演習の目的について概ね理解しています

【15】内容については2年目でしたので昨年度があったので理解して臨めました

【17】教育センターにおける説明会(H26.5.28)配布資料のとおり

【20】間接的にしか説明を聞いていないが、目的は理解できていたと思う。ただ、設問4の①以降については、目的として意識していなかった

【21】設問4の自由記述欄にも記入しましたが、設問⑩以降は意図的に指導すべき内容だと把握していませんでしたので、目的の理解が不十分だったのかもしれない

(2) 授業プロセスの具体について【全学】

授業のプロセスについては、既述のシラバスのとおりであるが、その具体についても若干の詳述を求めた。結果は、以下のとおりであった(文頭番号省略)。教科の特性等に基づいて、班構成や講義時間の配置、省察のスタイル等に関して、それぞれの授業担当教員において工夫がなされている様子がうかがえる。

- ・講義内容は以下の流れで行った。①教育実習における成果と課題のワークショップ、②模擬授業用の学習指導案の作成、③学習指導案の事前説明、④模擬授業の実施、⑤模擬授業の事後検討、⑥模擬授業を踏まえた学習指導案の修正、⑦教職実践演習の成果と課題。特に模擬授業は全員実施することができたので、とても充実したものだ。
- ・本人が克服したい授業部分について再度授業をしてみる、という構成で行いました。具体的な実践をもとに、学生が、授業を改良すること、授業実践に関して様々な角度から意見を得ること、複数の教員から授業周辺の要素(学級経営、教材研究方法、態度等)も含めてアドバイスを得ることを意図しました。
- ・最初の授業で、各自が履修カルテの追加シートを下に、課題を発表して、決定する。その後、その課題解決のための模擬授業作りを行い、授業を行う。家庭科は受講生が少ないので、全員が50分の授業を実施。
- ・理科では約60名を4名で担当しました。まず、ABの2つに分けましたが、その際も、まずは学校種(中高)、領域(物化生地)ごとに分けようとしたのですが、4人で等配分できません

でした。それよりも、領域等をできるだけばらばらにして、つまり、ランダムに分けたほうがいいということになり、このように分けました。理由として、①時に中学校の場合は領域を横断的に指導しなければならず、自分の得意領域だけでなく専門外の領域も対応する必要があります。②ほかの領域の考え方や学習内容を知ることができる。などが挙げられます。

- 学生のグループ分けについては、数学グループは中学校志望・高等学校志望が混在しているので、数学 A グループは、高等学校志望のみで構成し、数学 B グループは、中学校志望と高等学校志望を混在させました。教育センターの先生につきましては、数学 A には高等数学専門の先生を、数学 B には中学数学専門の先生にご担当頂きました。高等学校志望の学生が A と B のどちらになるかについては機械的に振り分けました。学生が模擬授業をする前に、センターの先生から「学習指導案作成の解説」を講義頂き、2 回分程、少人数による学生たちでの指導案検討の時間(みんなで学習指導案作成についての議論をする時間)を設けました。模擬授業については、教育実習で自分の課題になった箇所を中心に、導入部分や展開部分についての 20~30 分の模擬授業、そして 10 分の質疑で展開しました。受講学生全員が上記模擬授業を実施し、最後の 2 回で課題発表会の流れです。授業をどのようにブラッシュアップしたのか、またその結果はどうだったのかについて議論する時間が 10 分の質疑では少し短すぎるのですが、全員が模擬授業を実施するのであれば、受講人数の関係上、時間的に厳しい状態です。
- 学生自身が把握している自己課題内容が模擬授業の計画の作成方法や授業展開方法に関するものが中心となっていることから、授業内容や指導内容もそれに対応したことが中心となっている。段取りとしては、面談による学生の自己課題の確認、課題を踏まえた模擬授業の計画作成と授業実施、学生による相互評価、教員による指導助言、総合的評価としての報告会の実施となっている。
- 地歴公民科では、主として科目別にグループ構成をした。段取りについては高知大学の先生がおこなってくださった。
- 模擬授業の形態、流れ等計画も含めて全て大学教授と相談のもとに合同で行った。模擬授業は教育実習で行った指導案を中心に実施し、後の研究協議を通して改善点を踏まえ、後日再度模擬授業をすることでステップアップしながら授業実践力を高めていけるようにした。受講人数が少なかったため、一人当たり 2 回の模擬授業が出来た。
- 最初の授業で模擬授業の単元あるいは科目により 4 人ずつのグループ分けを行い、互いの相談活動の活性化を図った。その後は教職実践演習を 2 コマ連続に設定し、各授業日におけるおおむねグループから 1 人ずつとなる 5 人程度の模擬授業及び協議を長めに行うことで、学生同士が意見を言いやすい環境を整えた。
- 4 人 1 組編成で、各教育実習で行った学習指導案を基に模擬授業①を実施し、学習指導案(中学校 3 年「水溶液とイオン」)作成し模擬授業②として実施した。

- ・中学校、高等学校(単元別)にグループ分けをし、グループでの模擬授業での指導案検討から始まり、グループでの活動を取り入れた。その後、模擬授業をし、全体で協議をした。協議のあと、担当教員からの指導・助言をした。
- ・①教育実習のふりかえり(『履修カルテ』の作成)→②受講者の面接(学習指導案の作成や授業実践についての課題や困り感の確認)→③講義「学習指導要領をふまえた学習指導案の作成」、「効果的な授業づくり(導入・展開・終末のねらいや生徒の姿)」→④学習指導案の作成→⑤模擬授業・研究協議→⑥教職実践演習の報告会
- ・全員2回ずつの模擬授業と研究協議を行った。1回目は2グループに分け、グループで学習指導案を作成し、グループ代表が模擬授業(50分)を行った。2回目は1人ずつ模擬授業を行い、模擬授業終了後の残り時間で研究協議を実施した。教材についてはこちらが指定し、現代文・古典・漢文の分野に偏りがないようにした。
- ・グループ分けに関しては高知大学教授やったださっていましたので、私自身は関わっていませんでした。受講者29名を9グループ(中学校9名を3グループ、高等学校20名を6グループ)に編成していました。最初の時間に文部科学省の授業DVD視聴をして、学習指導要領の趣旨について確認しました。また、高知県で示している基本的な学習指導案の書き方、評価規準、参考資料等についても簡単に説明いたしました。その後は1時間に2グループを目安に授業、12月からは少しグループ編成を変えて2巡目の授業を行いました。各時間の授業前には各グループから授業についての説明(ねらいや留意点)を行ってもらい、授業後には学生たちが授業についてのグループ協議を行い、全体でのシェアを行った後、こちらからコメントを行うという形式で行いました。協議においては学生たちの授業の見取りが素晴らしく、的を射た多くの意見が出ていました。回を重ねるごとにさらに良いコメントが出ていました。基本的な学習指導案の書き方や、授業の進め方、学習指導要領の趣旨に沿った授業のあり方などを主眼においていましたが、学習指導要領の趣旨に沿った授業という点でおおむね全ての生徒が理解できているようでした。
- ・模擬授業を行う前に、指導主事のほうから学習指導要領の内容と表現や鑑賞の授業について提案授業屋内容について理解していただき模擬授業に臨みました。
- ・①授業担当教員A(大学教員)により、受講生の課題の確認と全体共有→②授業担当教員B(教育センター所員)より、「学習指導案の作成と授業づくりについて」と題して、「学力とは」、「学習指導要領」、「授業とは」、「学習指導案」、「言語活動の充実」等についての講義→③受講生作成の学習指導案の見直し(受講生による協議、授業担当教員からの助言)→④模擬授業、研究協議の実施→⑤教職実践演習の振り返り
- ・大学教授が2つにグループ分けをしていた。グループ分けについては地歴科と公民科・商業科という形だったので、学生も納得していたのではないかと思われる。
- ・専門分野の異なる学生同士をグループにして、学生同士の協議を中心に進行しました。一つの教材に対する見方が多数であることへの認識を深めることと、就職したから同僚と協

力し合って教育活動に臨む素地を作ることとを意図しました。

- ・授業における自己課題を把握させ、教科のねらい、学習指導案の書き方を示した後、教材研究、模擬授業、研究協議を行うことで、一連の授業づくりの流れを意識した。
- ・授業 1・2＝実習後の課題確認【ワークショップ形式】、授業 3＝授業づくりへの基礎の確認【講義】、授業 4～9＝模擬授業①（授業づくり【グループ協議】→指導案検討【全体協議】→模擬授業→振り返り【グループ協議】）、授業 10～14＝模擬授業②(模擬授業①と流れは同じ。ただし、指導案検討は除く)、授業 15＝教職実践演習のまとめ【グループ協議、レポート】。模擬授業①はグループで 1 つの模擬授業をつくっていく。教材研究に多様な視点を持たせるため。グループは 3～4 人で、教材は「化学基礎」か「生物基礎」のどちらかから選択させる。模擬授業②は全員が実施。模擬授業①で扱った単元の中から、本時を変更し授業展開を検討していく。模擬授業①で単元計画を作成し指導案検討をしているので、模擬授業②では指導案検討を省いた。

(3) 含めるべき事項について【全学】

教職実践演習の授業に含めるべき事項とされている「①使命感や責任感、教育的愛情」、「②社会性や対人関係能力」、「③幼児児童生徒理解や学級経営」、「④教科・保育内容等の指導力」のそれぞれを、授業にどれほど盛り込めたかを問うた。

模擬授業中心の授業であるがゆえに、他事項に比べて「④教科・保育内容等の指導力」を盛り込めたと回答する教員は多く、「十分に盛り込めた」との回答が 76.2%に達する。一方、「①使命感や責任感、教育的愛情」や「②社会性や対人関係能力」になると「まあまあ盛り込めた」とする回答が最も多くなり、「③幼児児童生徒理解や学級経営」では「まあまあ盛り込めた」と「あまり盛り込めなかった」とに分散している。

含めるべき事項を授業にどれほど盛り込むことができたか？【全学】

事項	十分に盛り込めた	まあまあ盛り込めた	あまり盛り込めなかった	ぜんぜん盛り込めなかった	計
①使命感や責任感、教育的愛情	23.8(5)	57.1(12)	14.3(3)	4.8(1)	100.0(21)
②社会性や対人関係能力	9.5(2)	52.4(11)	33.3(7)	4.8(1)	100.0(21)
③幼児児童生徒理解や学級経営	9.5(2)	47.6(10)	42.9(9)	0.0(0)	100.0(21)
④教科・保育内容等の指導力	76.2(16)	19.0(4)	4.8(1)	0.0(0)	100.0(21)

※数値は%、括弧内は度数、無回答・不明は除く。以下同様。

(4) 教員スタンダードの若年前期項目について【全学】

高知県の教員スタンダードの若年前期項目についてはどうか。教職実践演習アドホック部会から授業担当教員に対して提示した留意事項の箇所ですべてたとおり、若年前期項目のすべてについて授業に含めるよう要請はしておらず、活用し得るという表現にとどめている。な

お、受講学生に対しては、事前のオリエンテーション（7月実施、授業担当教員Aも出席）において、高知県教育センター指導主事の先生より教員スタンダードについて説明していただき、その上で、教職実践演習アドホック部会から、自己課題の明確化の作業において有益な指標となるゆえにぜひ活用してほしい旨伝えている。

授業実践に直接的に関わる事項 9「児童生徒の学習に対する意欲や興味関心を引き出す」、14「学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえた学習指導案の作成」、15「発問・板書・机間指導の効果的な活用」については「十分に盛り込めた」との回答が多い。「まあまあ盛り込めた」まで含めると事項 3「児童生徒との積極的なコミュニケーション」、4「児童生徒に対する公平かつ受容的・共感的な関わり」、13「年間指導計画に位置づけられた教材の価値を捉えた教材研究」、16「学習指導案や日々の授業計画に基づいた授業実践」も盛り込めたとの回答が多い。いずれも学級経営力や学習指導力に関わる事項である。セルフマネジメント力に含まれる事項 42「社会人としての常識（言葉遣い・マナー）」、48「チャレンジ精神、向上心、自己研鑽」も半数以上の教員において盛り込めたとしている。

これら以外の項目については盛り込めなかった（「あまり盛り込めなかった」＋「ぜんぜん盛り込めなかった」）との回答が多かった。

教員スタンダード若年前期項目を授業にどれほど盛り込めたか？【全学】

事項	十分に盛り込めた	まあまあ盛り込めた	あまり盛り込めなかった	ぜんぜん盛り込めなかった	計
1.児童生徒の実態に応じた人間関係づくりや集団づくり	14.3(3)	23.8(5)	57.1(12)	4.8(1)	100.0(21)
2.児童生徒が安心・安全に過ごせる学級づくり	9.5(2)	23.8(5)	52.4(11)	14.3(3)	100.0(21)
3.児童生徒との積極的なコミュニケーション	28.6(6)	52.4(11)	19.0(4)	0.0(0)	100.0(21)
4.児童生徒に対する公平かつ受容的・共感的な関わり	28.6(6)	33.3(7)	38.1(8)	0.0(0)	100.0(21)
9.児童生徒の学習に対する意欲や興味関心を引き出す	66.7(14)	28.6(6)	4.8(1)	0.0(0)	100.0(21)
13.年間指導計画に位置づけられた教材の価値を捉えた教材研究	33.3(7)	47.6(10)	14.3(3)	4.8(1)	100.0(21)
14.学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえた学習指導案の作成	71.4(15)	23.8(5)	0.0(0)	4.8(1)	100.0(21)
15.発問・板書・机間指導の効果的な活用	66.7(14)	28.6(6)	0.0(0)	4.8(1)	100.0(21)
16.学習指導案や日々の授業計画に基づいた授業実践	47.6(10)	47.6(10)	0.0(0)	4.8(1)	100.0(21)
27.地域行事への参加、地域との連携	0.0(0)	0.0(0)	33.3(7)	66.7(14)	100.0(21)
38.うまくいかないことがあっても前向きに対応し続ける	9.5(2)	38.1(8)	33.3(7)	19.0(4)	100.0(21)
39.ストレス解消法	0.0(0)	0.0(0)	33.3(7)	66.7(14)	100.0(21)
40.健康的な生活習慣、自己の健康管理	0.0(0)	0.0(0)	28.6(6)	71.4(15)	100.0(21)

41.教育公務員としての服務規律、規範意識をもつての職務専念	4.8(1)	33.3(7)	23.8(5)	38.1(8)	100.0(21)
42.社会人としての常識（言葉遣い・マナー）	9.5(2)	42.9(9)	19.0(4)	28.6(6)	100.0(21)
43.仕事とプライベートの区別	0.0(0)	4.8(1)	28.6(6)	66.7(14)	100.0(21)
44.スケジュール管理、時間厳守	4.8(1)	28.6(6)	33.3(7)	33.3(7)	100.0(21)
45.悩みが生じた際には管理職や同僚に相談する	5.0(1)	30.0(6)	25.0(5)	40.0(8)	100.0(20)
46.教員としての役割、教育的視点に立った公正な判断	4.8(1)	42.9(9)	28.6(6)	23.8(5)	100.0(21)
47.管理職や同僚等の助言を謙虚に受け止め、自己成長につなげる	4.8(1)	28.6(6)	33.3(7)	33.3(7)	100.0(21)
48.チャレンジ精神、向上心、自己研鑽	14.3(3)	38.1(8)	28.6(6)	19.0(4)	100.0(21)
49.人権尊重、多様な価値観の尊重、人権意識	9.5(2)	28.6(6)	52.4(11)	9.5(2)	100.0(21)

※事項に付した番号は「教員スタンダード」の事項番号と対応している。以下同様。

（５）履修カルテの活用について【全学】

履修カルテの活用に関する自由記述は、以下のとおりであった。授業担当教員にあっては、受講学生の現状を把握したり、受講学生を指導・評価したりする際に役に立ったとの意見が見られた。受講学生にあっては、シラバスに基づいて主として初回の授業（自己課題の明確化）で活用させている。教職課程全体を振り返るための材料として日常的に活用するよう指導していただいている例もあるが、学生自身がどれほど活用できていたかについては不明であるとの意見もあった。

<教員による活用>

- 【7】 受講者の課題が文字化されており、指導のために役立てることができた
- 【9】 教育実習における個々の課題が項目別に分かりやすい表になっており、面談時に大いに参考になりました。ありがとうございます
- 【12】 学習指導案の作成、授業実践について、受講者の困り感や課題等を把握して指導助言にいかす
- 【21】 学生理解のための事前資料として活用と、模擬授業②の時に自己課題の確認に活用
- 【17】 授業担当教員 A により、B も加わったなかで、全体共有ができた。授業担当教員 B は、それぞれの課題に応じた助言ができるように努めた
- 【8】 模擬授業をするときの一つの視点であり、また評価をする際の目安とした
- 【11】 個人面談、カルテの内容から個人の課題を読み取り模擬授業で克服しているかの資料に活用した
- 【18】 模擬授業において、課題を把握し、その課題解決に向けた取り組みができていくかどうかをチェックする際に活用した

【19】 学生全員の「履修カルテ」に目を通し、学生の現状把握に対する理解への助けとしました。その後も個々の学生への個別の助言に活用しました。演習が短期ですので、こうした資料は不可欠です

<受講学生による活用>

- 【1】 教育実習における成果と課題の整理を履修カルテを活用して行った
- 【3】 第1回目の授業で、課題設定のために活用した
- 【5】 最初の面談(課題の確認、模擬授業の内容を決定)で使用したのみで、課題の解決確認については、別途、提出レポートの形を課しました
- 【10】 開講時に教育実習における課題に基づく発表と閉講時に教職実践演習での課題に基づく発表として活用した
- 【20】 自己課題の把握と課題設定に活用した
- 【13】 第1・2回目の「履修カルテを使った面談及び自己課題の確認」や第14・15回の「自己課題解決確認のための発表会」の時に、「履修カルテ」を基に、課題を再確認させたり、取組を具体化させたり、課題の達成状況を発表させたりして活用した

<活用できなかった>

- 【2】 履修カルテは活用できませんでした
- 【4】 各自が持参し、振り返りに使うようには指示しましたが、どれだけ活用できていたかは疑問です。これは、例えば最後にもう一度見返してみても、自分の成長具合を自覚する程度に使うのが適切(それくらいが限界)なのではないかと考えています
- 【6】 活用できなかった
- 【14】 昨年度はカルテを元に生徒と面談をしましたが、今年度はあまり活用できませんでした

一方、学教の教職実践演習の授業担当教員1名に対する面接聴取調査では、以下のことが提示された。

(1) 教職実践演習の目的について【学教】

授業の目的は「将来教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を補い、その定着を図ることにより、教員として必要な資質を形成する」とした。その上で、オリエンテーションにて担当教員から学生に対して説明をし、自己課題シートを作成させ、面接を通して自己課題の明確化を図らせ、自己課題シートに基づくレポートを提出させた。

(2) 授業プロセスの具体について【学教】

国語・算数・社会・理科・道徳のグループを構成する。本人の希望（第1から第5）に基づきグルーピングする。今までは、第1希望でバランスよく構成できた。各教科別のグループは教科の特性に任せる。道徳については小学校低、中、高、中学校別に2から3人を単位として、共同で指導案作成、模擬授業を行った。ケーススタディでは、全体でディスカッションを行った。

(3) 含めるべき事項について【学教】

「④教科・保育内容等の指導力」については十分に盛り込めた。「①使命感や責任感、教育的愛情」と「③幼児児童生徒理解や学級経営」についてはまあまあ盛り込めた。「②社会性や対人関係能力」についてはあまり盛り込めなかった。

(4) 教員スタンダードの若年前期項目について【学教】

十分に盛り込めたのは、13「年間指導計画に位置づけられた教材の価値を捉えた教材研究」、14「学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえた学習指導案の作成」、15「発問・板書・机間指導の効果的な活用」、そして48「チャレンジ精神、向上心、自己研鑽」である。まあまあ盛り込めたのは、3「児童生徒との積極的なコミュニケーション」、4「児童生徒に対する公平かつ受容的・共感的な関わり」、9「児童生徒の学習に対する意欲や興味関心を引き出す」、16「学習指導案や日々の授業計画に基づいた授業実践」、38「うまくいかないことがあっても前向きに対応し続ける」である。これ以外の項目については、あまりないしはぜんぜん盛り込むことができなかった。

(5) 履修カルテの活用について【学教】

自己課題シート作成時に履修カルテを持参させ、説明させた。また、ディスカッション、模擬授業、レポート、指導案等を評価し、教員からのアドバイスを記入した。

【資料】 平成 26 年度第 2 学期「教職実践演習（全学）」についてのアンケート＜授業担当教員対象＞

実施者：教職実践演習アドホック部会

教職実践演習アドホック部会（以下、アドホック部会）の運営活動を検証するためのアンケートです。お忙しいなか恐縮ですが、ご入力の上、〇〇（アドホック部会長）宛にご返信願います【1月20日（火）×切】

設問 1. 教職実践演習の目的についてアドホック部会による説明は十分だったでしょうか？教職実践演習の目的についてのご自身の理解も含めて、ご記述ください。				
設問 2. どのグループも模擬授業を中心とした授業構成となっておりますが、具体的にどのような段取り（グループ分けしていただいた教科についてはグループ分けの作業も含めて）で授業を進めていただいたでしょうか？ 背後にあった先生の意図（狙い）も含めて、可能な限り具体的にご記述ください。				
設問 3. 全体として、以下に示す各事項について、どれくらい授業に盛り込んでいただくことができたでしょうか？ 該当番号を四角で囲んでください。				
	十分に盛り込めた	まあまあ盛り込めた	あまり盛り込めなかった	ぜんぜん盛り込めなかった
①使命感や責任感、教育的愛情	4	3	2	1
②社会性や対人関係能力	4	3	2	1
③幼児児童生徒理解や学級経営	4	3	2	1
④教科・保育内容等の指導力	4	3	2	1
本設問関連事項で何かご意見がございましたらご記述ください。				
設問 4. 全体として、以下に示す各事項について、どれくらい授業に盛り込んでいただくことができたでしょうか？ 該当番号を四角で囲んでください（番号の意味は設問 3 に同じ）。				
①児童生徒の実態に応じた人間関係づくりや集団づくり	4	3	2	1
②児童生徒が安心・安全に過ごせる学級づくり	4	3	2	1
③児童生徒との積極的なコミュニケーション	4	3	2	1
④児童生徒に対する公平かつ受容的・共感的な関わり	4	3	2	1
⑤児童生徒の学習に対する意欲や興味関心を引き出す	4	3	2	1
⑥年間指導計画に位置づけられた教材の価値を捉え、教材研究を行う	4	3	2	1
⑦学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえた学習指導案の作成	4	3	2	1
⑧発問・板書・机間指導の効果的な活用	4	3	2	1
⑨学習指導案や日々の授業計画に基づいた授業実践	4	3	2	1
⑩地域行事への参加、地域との連携	4	3	2	1
⑪うまくいかないことがあっても前向きに対応し続ける	4	3	2	1
⑫ストレス解消法	4	3	2	1
⑬健康的な生活習慣、自己の健康管理	4	3	2	1
⑭教育公務員としての服務規律、規範意識をもつての職務専念	4	3	2	1
⑮社会人としての常識（言葉遣い、マナー）	4	3	2	1
⑯仕事とプライベートの区別	4	3	2	1
⑰スケジュール管理、時間厳守	4	3	2	1
⑱悩み等が生じた際には管理職や同僚に相談する	4	3	2	1
⑲教員としての役割、教育的視点に立った公正な判断	4	3	2	1
⑳管理職や同僚等の助言を謙虚に受け止め、自己成長につなげる	4	3	2	1
㉑チャレンジ精神、向上心、自己研鑽	4	3	2	1
㉒人権尊重の精神、多様な価値観の尊重、人権意識	4	3	2	1
本設問関連事項で何かご意見がございましたらご記述ください。				
設問 5. 『履修カルテ』（先生方に事前配付の「追加シート」以外の部分）については、どのようにご利用いただいた（ご利用いただけなかった）でしょうか？ 具体的にご記述ください。				
設問 6. アドホック部会による教職実践演習（全学）の運営全般について、率直なご意見をお願いいたします。				

【A-3】 受講学生作成の発表会資料

受講学生は、教職実践演習の初回の授業で授業担当教員との面談を通して自己課題を明確化し、以降の授業を通して課題の克服に努め、最終授業で改めて自己課題について確認していくという作業を行う。それでは、受講学生は、教職実践演習の受講にあたりどのような自己課題を立てているのか。それが記された授業最終回で用いられた発表会資料を材料に概観する。すべての資料を蒐集することはできなかったが、概ねの傾向は把握できると考える。その記述された内容に基づいて分類すると、次のような事項を抽出することができた。

模擬授業中心の授業構成であるが故に、当然ながら、授業に関わる自己課題が設定されている。

<授業の流れに関する事項>

- ・ 導入・展開・まとめの流れのある授業
- ・ メリハリのある授業
- ・ 適切な時間配分
- ・ 導入の工夫、山場の設定
- ・ 授業中における流れの修正

- ・ 抽象的な表現を提示するタイミング

<教材研究・指導案に関する事項>

- ・ 教科書の枠に収まらない十分な教材研究
- ・ 先を見据えた教材具有・授業づくり
- ・ 指導案の作り方、評価規準の設定

<授業方法に関する事項>

- ・ グループ活動の導入
- ・ 子ども主体の授業
- ・ 子どもの読む活動における工夫
- ・ 子どもとの十分な相互作用による授業
- ・ 言語活動の充実
- ・ 目標の明確化
- ・ 多様な教具の活用
- ・ 個人差や発達段階を考慮した授業
- ・ 実生活との関連性を考慮した授業
- ・ 授業中における十分な子ども観察
- ・ 複式クラスでの授業

<自身の発話・対応>

- ・ メリハリのある話し方
- ・ 臨機応変な対応・受け答え
- ・ 興味関心を引く魅力的な発話
- ・ ルールを守れない子どもへの対応
- ・ 子どもとの適正な距離感
- ・ 子どもの安全の確保
- ・ 子ども理解
- ・ 個の特性に応じた支援
- ・ 褒めどころ叱りどころ
- ・ 子どもと接する際の公私の区別
- ・ ラポールの形成

<説明・発問・板書等に関する事項>

- ・ わかりやすい説明
- ・ 適切な板書（バランス）や発問

<学級経営に関する事項>

- ・ 学級経営の手法

上記は、学教及び全学の教職実践演習において、受講学生が明確化した自己課題を大雑把

にまとめたものである。但し、学教受講学生が立てた自己課題と全学受講学生が立てた自己課題とを比較すると、前者においてかなり「具体的」な自己課題が立てられているという印象であった（以下に示すとおり）。

教育学部学校教育教員養成課程（学教）の教職実践演習受講学生の自己課題

<p>国語</p>	<p>～授業展開(内容)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなが参加できる授業づくり ・グループやペアでの話し合い活動での発言に偏りが見られる ・内容に入りやすい授業導入 ・授業におけるポイントを明確にし、それに沿った発問や構成を考える ・全ての児童が授業に参加したいと思えるような授業づくりについて ・国語科における効果的な板書とは何か考える ・理解するスピードの異なる児童がいる中で、授業をどのように進めていけば良いか ・児童がどのような反応をするのかを想定し、それに対する手立てを考えて授業を行う ・授業中に子どもが学習につまずいたとき、戻って自然に再確認できるような授業のあり方について（導入の方法 授業の流れ 板書のしかた） ・学習目標を達成するための授業展開、板書計画について ・子どもが意欲的に発言し、その発言から授業をつくること(授業面の課題) ・生徒が好奇心をもって取り組めるような授業の内容、方法 ・児童が1時間での学びを実感できる授業について ・授業の流れが止まりそうになった時に、どのようにして流れを戻すか ・生徒自身に気づかせるための発問について(授業) <p>～授業展開(時間)について～</p> <p>～教材研究・活用について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材、単元における柱を見極め、この柱を中心にした授業づくりを考える ・音読などの読む活動の際、子どもたち自ら考え想像した意見に自信を持たせるような教師の手立てや受け答えの仕方について ・俳句や短歌などの伝統的言語文化に子どもたちが初めて触れる際、これから先子どもたちが古典教材に興味・関心を持つことができるような楽しい授業を構想するためのより良い手立ての仕方について ・複数の資料を元にした、生徒主体の授業づくりについて ・現代文の授業において、児童・生徒にとってわかりにくい抽象的な表現などが出てきたときにどのような具体例をどのタイミングで提示するか。 ・学習者の特性を考慮した指導のあり方について ・子どもにとって分かりやすく、意欲を持って学習を進めることができ、自分の考えが深まるような板書の工夫 <p>～自分自身の課題(コミュニケーション)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習者の学習意欲を高めるために教師の支援できることについて ・ルールを守れない子どもへの対応 ・教師と生徒という関係性を保ちながら生徒と円滑な関係を築く方法について ・生徒への叱責がどの生徒にも同じ様な対応になる ・生徒の普段の様子や友達との・関わり方に目を配り、配慮する必要がある ・児童のやる気を向上、持続させるための方法について ・生徒指導等で子どもたちに注意をする際の声掛けについて考える ・適切な褒めどころと叱りどころを把握して、子どもたちの自発性を高めるためにはどうすればよいか ・今後の課題は、子どもの興味や意識が向くような声かけである ・子どもの様子を読み取りながら、声の大きさや声色を工夫する
-----------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの行動の背景にある思いや感情を与え理解する ・より多くの子どもが意欲的に学ぶためには ・授業外での生徒との接し方や指導の仕方について ・自分の考えを押しつけず、子ども主体の学級づくりをすること(学級経営についての課題) ・いつもと様子が違う子どもにどう接すればいいか ・生徒の発言に対する対応力を磨く(授業面) ・よりよい学級づくりに関するアプローチについて学ぶ(学級面) ・授業プリントや生活日誌などの提出物を全く出さない児童生徒に対してどのような声かけ、アプローチをすれば自主的に出そうという意欲につなげることができるか <p>～学級経営について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に大きな影響を与え得る教師の気づきについて(学級経営) ・児童の実態把握を行い、集団指導の中で個の特性に応じた支援について ・規律を守り、互いに尊重し合う学級づくり ・互いを大切にできるクラスの雰囲気作りについて ・子どもが互いを認め合い、クラスの一員として協力することのできる学級経営について
社会	<p>～授業展開(内容)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが主体的に学ぶ授業設計。答えの限定された発問ではなく、開かれた発問というものをを用い、その発問に対する様々な子どもの反応をうまく授業の内容につなげていけるようにすることである(模擬授業)(22) ・自分の考えを表現できる児童を育てるための工夫を知る(23) ・板書の字が雑で小さすぎるので、もっと丁寧に大きく書けるようになる(25) ・問いが上手に伝わっていない時があるので問いの仕方を考えておく(25) ・授業：複式クラスでのそれぞれの授業の成立(26) ・導入部分での子どもたちに興味をひきつけるような表現力が自分には足りないのもっと子どもたちに関心を持ってもらえるように話したい(27) ・子どもたちの予想外の発言に対しての返し方が不十分なのでもっと応用力をつけたい(27) ・授業：児童の発言を引き出し、つなげ、意義づけし授業に活かす点(28) ・他の人の意見を聞き、自分の意見を再構築できる授業(29) ・子どもが主体的に考えるための発問の内容と提示。また、そこにつなげるための導入の工夫(30) ・授業の山場が分かる展開(30) ・授業：私は子どもの反応を予測しきれないこと、そして、ねらいに合った教材作りができていないことが自己課題としてあると思います。(31) ・子どもへの指導や注意を的確なタイミングで、適切に行うようにすること(34) ・単調な授業ではなく、生徒が夢中になって授業に取り組める授業構成の在り方(34) ・授業において子どもたちを引きつける話し方、授業の進め方ができていない(35) ・授業：導入での盛り上がりをいかに展開(主要設問)までつなげることができるか(36) ・教科の課題：授業の構成が苦手であること(37) ・順序立てた授業構成ができず、児童が途中から分からなくなるような授業になってしまうこと(37) ・児童から発言を引き出し、そこから上手く展開することができないこと(37) ・指導案通りにうまくいかない場合焦りやすい(38) ・板書力が欠如である(38) ・子どもが切実な問いを持って授業に取り組み、その中で、子どもの意見を積極的に取り上げて、その意見を使って授業を展開できる(39) ・授業中や学活中に立ち回ったり、話し出す生徒に対して適切な指導をすることができなかったのも、きちんとした指導力を身につけたい(40) <p>～授業展開(時間)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予想外のことが発生すると、なかなか予定の進み方に戻れない(38) <p>～教材研究・活用について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の反応や動きを想定した学習指導案を作成すること(23) ・模擬授業について、導入に用いる教材、展開時に用いる教材に関して、子どもの思考とつながりを

	<p>持たせることができ、問題解決の手段となりうるような教材を授業と子どもの思考が一致することを目的として研究する(24)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材研究をもっと徹底的にして、子どもたちに何を考えさせるのかを的確にしてそれに対する手立てをしっかりと考えたい(27) ・教科：私は教育実習で、授業において最終的に児童に何を学ばせたいのかをもっとはっきりさせるということを先生にご指摘頂いたので、それが課題です(32) ・教科書に書いてあることを、淡々と進めるような授業になってしまい山場がない(35) <p>～自分自身の課題(コミュニケーション)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちに説明をする際に自分の説明が上手くまとまっておらず、生徒が納得のいく説明をできるようにしていきたい(40) ・児童一人ひとりへの個別対応が足りない(38) ・言語力の不足により、コミュニケーションが少ない(38) ・児童全員への意識を忘れないように心がけていきたい(37) ・自分はどちらかと言えば、距離をおきすぎてしまうほうである(35) ・児童生徒との距離感の取り方がわからない。離れすぎても、近すぎてもいけない気がする(35) ・ほめる時の言葉のレパートリーが少ないので増やす(25) ・何をどのような場面でどう叱れば効果的なのかを理解する(23) <p>～学級経営について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級経営：言い争いになった児童の仲裁(26) ・学級経営について、子どもたちが授業や普通の学校生活において積極的な発言ならびに主体的な行動がとれるように、各行事や授業の中で自分の意見を自由に述べることができ、様々な問題に対して子どもたち自身で解決できるような経営について考える(24) ・色々な活動や授業に積極的に参加し、自分がどうすべきなのかを自ら考え、行動できるようにすることである(学級経営)(22) ・学級経営：児童が所属意識を持つことのできる学級をつくる点(28) ・お互いがフォローしていける人間関係づくり(消極的な子も支えられる)(30) ・学級経営：私は、子どもと先生としての対応ではなく、仲の良い友達として接していることが自己課題だと思います(31) ・学級経営：大人数のクラスの中の児童1人1人とどのようにコミュニケーションをとっていくべきか(32) ・学級経営：一部の子どもだけでなく、クラス全体を見て、一人ひとりに十分な時間をかける(36) ・学級経営：子どもたち全員への意識が保てないということ(37) ・クラス経営に関して全く自信がなくや経験がなくて不安である(38) ・学級経営：子どもの頑張っているところが、しっかりと認められる学級(39)
道徳	<p>～授業展開(内容)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で、集中して作業に取り組んだり、意欲的に取り組んだりすることができない児童への対応(41) ・板書を分かりやすく、ポイントを絞って簡潔に書く(41) ・学級の中で、弱い立場に立たされている児童への対応(41) ・指導案に頼りすぎず、子ども達の反応を見ながら授業をする(42) ・授業の目標からブレずに、事前に子ども達一人一人にあった対応や対策等を用意し、授業の見通しをもつ(42) ・保育の時間に、ゲームから脱線してしまう子どもがいた時の対応(43) ・授業の中での発達段階にあった手立ての工夫について考える(44) ・模擬授業：発問を工夫し、児童の考えを上手く引き出す(46) ・児童の発言を展開に生かす(些細なつぶやきも拾う)(46) ・板書を工夫する(46) ・教師の一方的な説明ではなく、資料を通じて児童ひとりひとりに自己との関わりで道徳的価値を捉えさせる(46) ・子どもの興味を引き出す授業展開の在り方(47) ・子どもの素直な意見を反映させる板書の在り方(47)

- ・板書の構造化(思考の過程を整理できるもの)(49)
- ・自分自身の考えを持たせることができる発問、授業展開(49)
- ・授業に関する目標:子どもたちの意識に働きかけ、事故を見つめ直すことができる指導の在り方(50)
- ・目標を明確にし、自分が教えたいことをしっかり設定した授業(50)
- ・教師の説明中心の授業ではなく生徒自身が主体的になって考える授業づくり(50)
- ・模擬授業:毎回の授業を計画的に進める(51)
- ・授業にメリハリをつける(51)
- ・板書を分かりやすく、丁寧にする(52)
- ・授業にメリハリをつける(52)
- ・道徳の授業だからこそ、子どもたちに教えられることを知り、それを子どもに伝えること(53)
- ・子どもが「道徳を学んで良かった」と思えるような授業づくりをすること(53)
- ・生徒の発言を引き出し、内容を深める発問をする(54)
- ・授業内容に実感を持たせる指導法の工夫をする(54)
- ・生徒の気持ちを理解し、それを指導に生かせるようにする(54)
- ・授業を学級の児童全員で進めていくこと(55)
- ・子どもの何気ない発言を拾って、臨機応変に授業の内容をふくらませていくこと(56)
- ・子どもにとって分かりやすい発問の仕方(57)
- ・自身で満足していく指導案作成(58)
- ・多様な思いや考え方を引き出す授業展開の工夫(58)

～授業展開(時間)について～

～教材研究・活用について～

- ・教材開発力(57)
- ・より洗練された授業を行うため、他者の授業をよく観察、批評し参考とすること(53)
- ・道徳の授業において、魅力ある教材を選定し、生徒が自分のこととしてとらえ、生徒のもつ多様な価値観や考え方を引き出すような授業をすること(45)
- ・児童の実態にあった授業づくりができるようにする(44)

～自分自身の課題(コミュニケーション)について～

- ・子どもと接する時の公私の区別のつけ方(58)
- ・教員同士の連携(T1、T2等)(57)
- ・「教える」授業ではなく、「考えさせる」授業をすること(56)
- ・授業において、子どもたちの考えを引き出し、ひろげること(55)
- ・生徒全体の様子を意識し、コミュニケーションをとって(52)
- ・自分と合わない子との接し方について学ぶ(51)
- ・心に悩みを抱える子どもへのアプローチの仕方と周囲の意識改善の指導の在り方(50)
- ・少し問題行動のある児童との接し方(48)
- ・児童の発言が予想外のものであった時の対応(48)
- ・褒め方、叱り方を身に付ける(47)
- ・児童が理解しやすい発問をすること(48)
- ・学級経営:効果的なほめ方、叱り方について考える(46)
- ・特に、発達障害等支援がいる子ども達へのコミュニケーションを大切に、仲間や先輩方等にアドバイスを聞き、慎重に対応する(42)
- ・子ども同士のけんかが生じたときのトラブルと全体へのそれぞれの対応(43)

～学級経営について～

- ・学級・子ども一人ひとりの実態把握(57)
- ・学級経営において、いけないことをした子どもをきちんと叱るということ(56)
- ・他学年集団(応援団)をまとめること(55)
- ・学級経営:非行やいじめ等問題が起きた時の対応について学ぶ(51)
- ・学級経営に関する目標:児童、生徒がしっかり納得して改善しようとする意志を持たせる指導(叱り方)方法(50)
- ・児童の実態把握(言動の背景にあるものは何か。どういう支援が適切か)(49)

	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒がお互いの考えを認め合えるように、日頃から意見交換をしっかりとできるような学級環境を形成すること(45) ・学級において、児童が互いに認めあえるような工夫を考える(44) ・遊びの時間の終わりなど、子ども自身で時間に区切りをつけられるようにする時の対応(43)
理科	<p>～授業展開(内容)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたち全員が、自ら本時の課題に気づき、考察し、主体的に課題を解決できるような(解決に近づくような)授業を行う(59) ・子どもたちに「理科っておもしろい」と思わせることができる授業を行う(59) ・理科の授業の結果の場面で測定誤差が出てしまったときの考察のしかたと結論づけをどう展開していくか(60) ・思考が止まっている子どもに対する手立てをとること(61) ・模擬授業：系統性を持った指導を考えること(62) ・児童の豊かな発想をひき出すこと(発問の工夫、受け止める姿勢、教材の提示の仕方)(62) ・授業を行なう際、指導案の展開に沿って進めることを意識しすぎていつも教師からの一方通行のような授業になってしまうこと(63) ・生徒の何気ないつぶやきや疑問の声にも耳を傾けることで生徒の意見から授業を展開し、一人一人の生徒の疑問をクラス全体で共有できるような授業を行いたい(63) ・つながる授業づくり(64) ・授業での導入において、本時の内容に興味を持たせ、生徒を引きつけた授業ができるような工夫の仕方(65) ・授業のポイントをおさえた課題設定と、それに応じた「発問」です(66) ・具体的に授業のポイントをおさえていくことを通し「発問」を意識した授業に取り組んでいきたいです(66) ・授業における効果的なアプローチ(67) ・活動における指示(67) ・私の課題は、現象を分かりやすく説明するための表現力(68) ・模擬授業：児童の思考の流れに沿った児童への対応(児童の発言や、つぶやきの取り上げ方など)(70) ・誤った認識から児童の主体性を引き出す授業づくり(模擬授業について)(71) ・帰納的以外の考察や結論への導き方(主に実験での授業の型の少なさ)(72) ・模擬授業：子どもの発達の段階に応じた授業や指導(73) ・児童1人ひとりが課題に対して疑問をもつための導入の工夫(74) <p>～授業展開(時間)について～</p> <p>～教材研究・活用について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校に近い中学校理科の授業(72) ・具体物、科学ネタを増やす(72) ・理科に苦手意識があり、理科の楽しさを伝える自信がないため、教材の分析や教材開発ができるよう力をつけたい(69) ・分かりやすく説明するための知識不足(68) ・「発問」を考えるための要素として、授業展開や教材を明確に把握しておくこと(66) <p>～自分自身の課題(コミュニケーション)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに対する言葉かけ(ほめ方、しかり方)(59) ・子どもへの褒め方、しかり方について(60) ・生徒との距離間(67) ・生徒への対応力(68) ・教育実習中に、不登校の女子生徒が登校してきてどう声をかけるべきかわからなかったこと(72) ・子どもとの信頼関係のつくりかた(74) <p>～学級経営について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで支え合う学級にするための手立てとは(61) ・学級経営：一人一人の意見、存在が大切にされ、子ども同士が互いに思いあえる学級づくりについて

	<p>て考えること(62)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業：知識を活用して思考する、生徒主体の授業づくり(64) ・学級経営：生徒に寄り添いながらも、しっかりと指導を行える教員としての手だて(64) ・学級経営においては、個々の生徒にあわせた対応の仕方(生徒理解)と生徒に対する言葉のかけ方(65) ・学級経営については、子どもへの声かけや指導についての適切な方法を学んでいきたいと思ひます(66) ・学校生活で、どうしても周りの子どもよりも遅れてしまうマイペースな子どもへの対応はどのようにすべきか(69) ・学級経営：児童が日常生活で発する良いつぶやきや悪いつぶやきへの対応(70) ・自然と児童間で優しい言葉の出る学級を育てるための教師の働きかけ(学級経営について)(71) ・学級経営、心に響く声かけ(72) ・学級経営：個々の子どもの特性や、状況に応じた対応の仕方について(73)
算数	<p>～授業展開(内容)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを説明することに苦手意識を持つ児童生徒への指導(76) ・生徒の反応を多く予想できるようにし、円滑な授業を行えるようにすること(77) ・子どもが主体的に活動できる授業づくり(78) ・授業の中で、分からない子、理解するのが難しい子に対する指導や手立て(79) ・子どもが自分から進んで学ぼうという意欲を持って、取り組める指導をする(80) ・算数の授業において、児童が理解を深められる板書づくり(81) ・算数の授業において、授業に参加できない児童への対応(81) ・授業については、子どもの立場に立ったわかりやすい発問を心掛けるようにする(82) ・模擬授業：生徒の発言の上手な収集と処理について(83) ・児童、生徒が興味を持ってくれるような授業づくり(84) ・教育実習の時自分の目線で授業づくりをおこなっていた(85) ・既習の私と未習の生徒との間にはとても大きな差があるので、生徒の目線に立って、授業を作ることが私の課題の一つとして挙げられる(85) ・視覚的に分かりやすく、楽しく、クラスの団結を高めるような授業を考えること(88) ・学年発達を意識した指導について(89) ・本時の目標を全員が達成できる授業をする(90) ・発問の意図がしっかり伝わるよう心掛け、児童がこの授業で何を学んだかが分かるようにする(91) ・子どもたちの発言を使って、授業を進めていけるようにする(92) ・子どもの集中力が続けられる授業(展開で子どもの目を光らせるものにする)(94) ・生徒の状況、レベルを十分把握できない(95) ・作ったワークシートが分かりにくい(95) ・生徒から出た意見やアイデアをまとめられない(95) ・グループ活動をさせる時に、ホワイトボードに関係のない絵を描いていたり、手遊びしたり、私話をしたりする生徒への対応(95) ・興味を持ち、楽しく学べる授業は？(96) ・時機に応じた適切な発言、発問ができるか(97) <p>～授業展開(時間)について～</p> <p>～教材研究・活用について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚教材をどのように提示すれば、子ども達が興味を持ち、一緒に考え、学ぶことができるか(93) ・授業：子どもの実体や既習事項などを踏まえた、細やかな教材研究をすること(86) <p>～自分自身の課題(コミュニケーション)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の対応(学級・授業)(96) ・自分の意見や考えをはっきりと述べることができるか(97) ・子どもが分かりやすい言葉を使って授業をする(92) ・学級経営に関しては学校生活における、生徒との接し方を確立させること(77) ・教育実習の時、積極的に話しかけてくる生徒もいれば、そうでない生徒もいた。あまり話しかけてこない生徒への対応も私は課題の1つである(85)

	<p>～学級経営について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが授業で質の高い問いを持つことができ、一人一人の個の問いに対して教師含め全員が関心を持つ学級づくりについて考えていきたい(87) ・学級経営：子どもたちと信頼関係を築くこと(86) ・授業やホームルームの時間などに集中できない児童・生徒にはどのように対処するか(84) ・学級経営：席替えの仕方について(83) ・学級経営については、子どもの気持ちを考えて、ひとりひとりに応じた対応ができるようにする(82) ・子どもをひきつけて、楽しい雰囲気の中で授業に取り組めるようにする(75) ・クラスの中でルールが学級経営にどのように影響しているのか知る(75)
--	--

教育学部学校教育教員養成課程以外（全学）の教職実践演習受講学生の自己課題

家庭	<p>～授業展開(内容)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入・展開・まとめ、と流れのある授業をする ・授業の中での「山場」を設定し、メリハリのある授業をする ・メリハリをつけた授業にする ・授業の流れが切れないようにする ・グループ活動を取り入れる ・グループ活動の工夫(実習でグループワークを取り入れたところ、予想以上に活動が盛り上がり、時間が足りなかった) ・グループワークをしっかりと誘導する ・導入部分を工夫する <p>～授業展開(時間)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業のメリハリ(話し合いの時間と話を聞く時間の切り替え・メリハリ) ・時間配分 <p>～教材研究・活用について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書以外の資料の活用 ・教材研究を十分にし、自分の言葉で分かりやすく説明する <p>～自分自身の課題(コミュニケーション)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メリハリのある話し方にする ・臨機応変な受け答え(机間指導中、生徒からの質問に答えることができなかった) ・興味・関心を持たれる魅力的な発話
数学	<p>【数学A】</p> <p>～授業展開(内容)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入をどのようにするのが生徒にとって一番良いのか ・公式をそのまま説明するのではなく生徒にイメージしやすいことを教えてあげ忘れてしまっても思い出せる説明をする ・私立文系(数学を受験に使わない生徒)に対して、どれだけ分かりやすく説明をすることができるか ・生徒が考えるポイントはどこなのかを考える ・全体を捉えた授業計画と系統を考えた教材研究 ・授業中のスキルアップも必要である。例えば黒板の書き方や発問の仕方などである ・教育実習で同じ単元を教えたときは理解できていない生徒が多かったため、丁寧に説明することを心がけた。 ・数学が苦手な生徒に対してもわかりやすく、問題が解けるような指導を行なう。 ・教師主体の授業になってしまうことが多かったので、生徒に考えてもらう時間を作るようにする。 ・1コマの中でどこが一番重要なのか最も伝えたいところはどこなのかを明確にすること ・なるべく生徒に発言してもらいたい ・全体の達成させるポイントを決めておく ・板書での書き方、解き方は生徒の見本となるように書く

- ・問題の意図を読み取り厳選する
- ・表記を正しく書いたり、色などを使ったりすることによって板書を見やすくすること
- ・どこが大事な部分かをはっきりとわかるように授業を行う
- ・説明と考えさせるところのメリハリをつける
- ・見やすい板書
- ・板書のバランス
- ・板書のバランスが悪い
- ・文字の大きさやバランスを考えた板書をする
- ・板書はむりして書かないようにし、何を一番伝えたいかを明確にする

～授業展開(時間)について～

- ・時間配分が下手(間に合わない時と余る時の差が激しい)
- ・時間配分に気をつけながら授業をすること
- ・50分(20分)という制限時間に気を付けることにも心がけた。
- ・授業のペースが予定より遅い時間が多かったので、ペースをしっかり保つようにする

～教材研究・活用について～

- ・教材研究が足りない
- ・1つの単元に対する教材研究(わからない子に対してのアプローチをするために説明を考えておく)
- ・二次関数などのグラフが汚い
- ・教材研究をしっかりして生徒のつまづく所をしっかり説明する
- ・最も必要なことは、教材研究をもっとやらなければならないと思った

～自分自身の課題(コミュニケーション)について～

- ・生徒の退屈しない授業を行う
- ・生徒とのコミュニケーションを多く取るような授業を行う。
- ・生徒の発問に対して臨機応変に対応する
- ・自分の気分によって授業の雰囲気を変えないようにする
- ・生徒の反応をよく観察しながら授業を進めていく
- ・生徒の反応、理解度を見て臨機応変に対応する。

【数学B】

～授業展開(内容)について～

- ・班活動(8班)
- ・図示するなら正確に書く
- ・授業のバランスが悪かった
- ・授業を進めていくリズムや順序が悪かった
- ・発問が難しい
- ・色付きチョークをあまり使っていなかったため黒板が白く面白くなかった
- ・予想外な質問への対応
- ・授業の中で最も大切なことを明確にしつつ生徒が考える時間をしっかりとりたい
- ・指導案通りの授業ではなく臨機応変に対応する
- ・板書の確認、色
- ・目標は何か
- ・板書を見やすくする
- ・教師主体の授業になったので生徒主体の授業ができるようになる
- ・生徒、クラスの実態を把握し、それぞれに合う学習指導を行う
- ・数学の授業実践において課題に思うことは、授業を進めるテンポが良くないことです。テンポの悪い授業は時間内に予定しているところまで終わらせることができないという問題や下手をすると生徒の数学への興味をうばってしまうこともあるので、生徒が興味を引くような授業をするにはやはりテンポが大事だと思い、いかに生徒主体の授業をしていくかがポイントだと思います
- ・言語活動の充実
- ・視覚的アプローチ
- ・生徒の考えやアイデアを活かす(生徒に 2^{42} は何桁の数なのかを考えさせずに次々と進めてしまっ

<p>た。結局は生徒の自然な思考に沿った授業ができなかった)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒がまとめやすいような板書作りをする ・教材研究をしっかりし生徒の既知の情報と道の情報を判断する ・クラスのレベルに合った授業をする ・発問の仕方(発問してから指名するのではなく指名してからの発問になっていた) ・板書についてノートにとってほしいところはどこなのか、書くのに必要な時間の計算を明確にする ・発問をわかりやすく、簡潔にする ・板書の計画をしっかり立てる(授業がスムーズに進むように) ・見やすい板書 ・生徒主体の授業にする ・授業に山場をつくり、生徒に集中させ、印象深い授業にする <p>～授業展開(時間)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間配分に気をつける ・導入部分で時間をかけすぎている。動機付けが不十分で生徒の興味を持たせられていない ・問題を解かせる時間が長すぎた ・時間配分が悪く生徒にとっては量が多すぎた 30 ・授業中の時間配分が上手くできなかったこと ・生徒が自ら考える時間を多く確保する。そして、その考えに沿った自然な流れの授業を行う <p>～教材研究・活用について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入の問題から難易度が高かった 例)AOYAMARYO の 9 文字 ・内容が易しいところは計画通り進めることができたが、少し難しくなってくると計画通りに進めることができなかったので、しっかり準備して授業に臨む必要があった ・導入部分を教科書通りではなく自分なりにアレンジを加える ・ベン図の有用性をうまく伝えるようにしたい ・授業のレベルの設定を中間層に合わせ、マンネリした授業にならないように発展問題を加える ・場合分けが必要なところで最初に場合分けを用いて解くと言ってしまったので、生徒自身がどのように解くのか考えさせれば良かった ・教科書通りの説明で内容をさらに難しくしてしまったので改善する ・教材研究、いろいろな出版社を比較し参考にする ・部分分数分解の良さを実感できるような授業を行う ・授業の終盤でも導入を活かす(導入で 2^{42} に興味を持たせて、終盤で 2^{42} の桁数を求めるだけで終わってしまった) ・教具などを用いて、もっと視覚的にアプローチしたら良かった <p>～自分自身の課題(コミュニケーション)について～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声の大きさと抑揚の話のはやさ ・抑揚をつけてメリハリのある授業にする ・生徒の表情を見るようにする ・黒板の方を見過ぎで生徒に背中を見せている ・一方的に話していて教師主体の授業になっていた ・発問があいまいで生徒が何を答えて良いのかわからない様子だった ・生徒の方をあまり見れていなかった ・板書や説明をする際に立ち位置が悪く黒板が見えない生徒がいたので立ち位置も考えながらやらないといけない ・授業では説明することが多くなったり、生徒の発言も特定の何人かだけになることもあったので、多くの生徒が考えを発表する機会を作るなどして一方的な授業にならないようにしたい ・緊張や焦りが生徒に伝わった ・体の向き

【B】教職実践演習はどのような効果をあげているのか？

それでは、教職実践演習はどのような効果をあげているのだろうか？ この点については、受講学生（学ぶ側）に対するアンケート調査に基づいて明らかにしていきたい。

体系的な教員養成カリキュラムの開発については、多くの大学において研究と実践が蓄積されているが、その一方で、教職志望学生がいかに成長・発達したかという点については重視されてこなかったとの指摘もあり、「学ぶ側」の視点にもとづいた教員養成カリキュラムの検証や改善が求められている。「学ぶ側」の視点に基づく教員養成カリキュラム改革を実現するためには、まずは、教員志望学生自身の認識を把握することが不可欠である。

【B-1】受講学生に対するアンケート調査

こういうわけで、受講学生を対象としたアンケート調査の実施・分析を行うこととした。調査事項は以下のとおりである（なお、アンケート用紙については後掲している）。

- (1) 教職実践演習の目的について
- (2) 含めるべき事項について
- (3) 教員スタンダードの若年前期項目について
- (4) 履修カルテの活用について
- (5) 教職実践演習について
- (6) 教職課程全般について

まず、全学の教職実践演習受講学生に対する調査（対象者数 242、有効回収票数 203、有効回収率 83.9%）の結果から見ていく。

(1) 教職実践演習の目的について【全学】

教職実践演習のイメージについて問うたのだが、これは教職実践演習の目的をどのように理解しているのか、ということでもある。結果は、「教職課程全体の総仕上げ」34.5% (68)、「教育実習の振り返りと総仕上げ」51.8% (102)、「教科教育法に関わる力量向上」13.2% (26)、「その他」0.5% (1) であった（無回答・不明は除く。以下同様）。オリエンテーションにおいて、教職実践演習の目的は「教職課程全体の総仕上げ」である旨説明はされているものの、授業構成そのものが模擬授業中心であるために、どうしても「教育実習の振り返りと総仕上げ」と回答する者が多かったと思われる。

(2) 含めるべき事項について【全学】

教職実践演習の授業に含めるべき事項とされている「①使命感や責任感、教育的愛情」、「②社会性や対人関係能力」、「③幼児児童生徒理解や学級経営」、「④教科・保育内容等の指導力」のそれぞれが、授業にどれほど盛り込まれているかを問うた。いずれの事項についても、6割～9割の学生が盛り込まれていた（十分+まあまあ）と回答している。

模擬授業中心の授業であるがゆえに、「④教科・保育内容等の指導力」が盛り込まれていたと回答する者はやはり多いが、そのみならず、「①使命感や責任感、教育的愛情」や「②社会性や対人関係能力」が盛り込まれていたとする者も8割に達する。シラバスでは「模擬授業」と掲載されているが、模擬授業の実施を手段として、実際にはさまざまな事項についての指導がなされていることがわかる。「③幼児児童生徒理解や学級経営」が盛り込まれていたとする者は最も少ないが、それでも6割に達している。

含めるべき事項が授業にどれほど盛り込まれていたか？【全学】

事項	十分に盛り込まれていた	まあまあ盛り込まれていた	あまり盛り込まれていなかった	ぜんぜん盛り込まれていなかった	計
①使命感や責任感、教育的愛情	32.7(66)	52.4(106)	14.9(30)	0.0(0)	100.0(202)
②社会性や対人関係能力	32.2(65)	53.4(108)	13.4(27)	1.0(2)	100.0(202)
③幼児児童生徒理解や学級経営	27.4(55)	38.3(77)	29.9(60)	4.5(9)	100.0(201)
④教科・保育内容等の指導力	58.5(118)	36.1(73)	5.4(11)	0.0(0)	100.0(202)

(3) 教員スタンダードの若年前期項目について【全学】

大勢的に見ると、盛り込まれていた（十分+まあまあ）とする事項が多い。

取り分け、学習指導力に関わる事項番号13,14,15,16及び9については「十分に盛り込まれていた」（いずれも5割前後）と回答する学生が多い（「まあまあ盛り込まれていた」と合わせると8割～9割）。教職実践演習の授業軸が模擬授業の実施とそれに対する指導であることから、当然の結果であるといえる。

一方、盛り込まれていたと回答した者が比較的少なかったのが、27,39,40,43の4事項である。27,39,40,43はチームマネジメント力ないしはセルフマネジメント力に関わる事項であるが、他の事項に比べるとその学習は希薄であったということである。

それ以外の項目では、「まあまあ盛り込まれていた」との回答者が多かった。

教員スタンダード若年前期項目が授業にどれほど盛り込まれていたか？【全学】

事項	十分に盛り込まれていた	まあまあ盛り込まれていた	あまり盛り込まれていなかった	ぜんぜん盛り込まれていなかった	計
1.児童生徒の実態に応じた人間関係づくりや集団づくり	22.8(46)	47.0(95)	25.7(52)	4.5(9)	100.0(202)
2.児童生徒が安心・安全に過ごせる学級づくり	15.8(32)	45.6(92)	32.2(65)	6.4(13)	100.0(202)
3.児童生徒との積極的なコミュニケーション	36.6(74)	39.1(79)	19.3(39)	5.0(10)	100.0(202)
4.児童生徒に対する公平かつ受容的・共感的な関わり	26.2(53)	50.0(101)	19.8(40)	4.0(8)	100.0(202)
9.児童生徒の学習に対する意欲や興味関心を引き出す	58.4(118)	31.2(63)	9.9(20)	0.5(1)	100.0(202)

13.年間指導計画に位置づけられた教材の価値を捉えた教材研究	49.5(100)	37.6(76)	11.9(24)	1.0(2)	100.0(202)
14.学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえた学習指導案の作成	55.5(112)	38.1(77)	5.9(12)	0.5(1)	100.0(202)
15.発問・板書・机間指導の効果的な活用	45.0(91)	41.6(84)	12.4(25)	1.0(2)	100.0(202)
16.学習指導案や日々の授業計画に基づいた授業実践	47.0(95)	42.6(86)	9.4(19)	1.0(2)	100.0(202)
27.地域行事への参加、地域との連携	3.5(7)	14.4(29)	39.3(79)	42.8(86)	100.0(201)
38.うまくいかないことがあっても前向きに対応し続ける	17.0(34)	47.0(94)	30.0(60)	6.0(12)	100.0(200)
39.ストレス解消法	6.0(12)	18.5(37)	42.5(85)	33.0(66)	100.0(200)
40.健康的な生活習慣、自己の健康管理	11.0(22)	25.5(51)	34.0(68)	29.5(59)	100.0(200)
41.教育公務員としての服務規律、規範意識をもつての職務専念	19.4(39)	39.3(79)	25.9(52)	15.4(31)	100.0(201)
42.社会人としての常識（言葉遣い・マナー）	24.9(50)	38.8(78)	24.9(50)	11.4(23)	100.0(201)
43.仕事とプライベートの区別	10.4(21)	25.9(52)	40.3(81)	23.4(47)	100.0(201)
44.スケジュール管理、時間厳守	26.4(53)	35.3(71)	26.4(53)	11.9(24)	100.0(201)
45.悩みが生じた際には管理職や同僚に相談する	18.4(37)	33.3(67)	29.9(60)	18.4(37)	100.0(201)
46.教員としての役割、教育的視点に立った公正な判断	29.4(59)	50.7(102)	15.4(31)	4.5(9)	100.0(201)
47.管理職や同僚等の助言を謙虚に受け止め、自己成長につなげる	29.0(58)	47.0(94)	14.0(28)	10.0(20)	100.0(200)
48.チャレンジ精神、向上心、自己研鑽	38.0(76)	48.5(97)	11.0(22)	2.5(5)	100.0(200)
49.人権尊重、多様な価値観の尊重、人権意識	27.9(56)	45.2(91)	19.4(39)	7.5(15)	100.0(201)

（４）履修カルテの活用について【全学】

教職実践演習は「学びの軌跡の集大成」であり、教職課程での学び全般について省察していく授業である。この点で、自らの学びの軌跡を記した「履修カルテ」はまさに必携の資料であるといえる。しかしながら、実際のところ、授業ではそれほど活用できていない。「頻繁に活用した」と回答する学生はわずか 1.5% (3) に留まっており、以下、「ときおり活用した」38.3% (77)、「あまり活用しなかった」36.8% (74)、「ぜんぜん活用しなかった」23.4% (47) という結果であった。

（５）教職実践演習について【全学】

教職実践演習に対する満足度については、「非常に満足できるものであった」36.5% (73)、「まあまあ満足できるものであった」52.5 (105)、「あまり満足できるものではなかった」8.0% (16)、「ぜんぜん満足できるものではなかった」3.0% (6) という結果であった。

なお、教職実践演習について自由に記述してもらったところ、受講学生から、以下のよう

な意見が提出された。主要事項を要約すると、以下のようになる。但し、当然ながらサイレンとマジョリティの存在の可能性もあるので、あくまでも受講学生の意見の一端に過ぎない

- 1) 教職実践演習の授業内容を教育実習前に受講したかった
- 2) 授業目標に照らすと、振り返り・省察の時間が不十分であった
- 3) 学生間で受講態度に温度差があり、弊害がある
- 4) 4年間に渡って作成してきた履修カルテの意義を見いだせない

<開講時期について>

- 【7】講義内で得られる知識・情報は教職を目指すにあたって有意義なものだと思ったが、教育実習前に知りたかったと思うことばかりだった。15時間前も授業がある割にはほとんど模擬授業を見るばかりだった。(時間がないため本来大切なディスカッションの時間が少なすぎる)
- 【23】教育学部ではないので、厳しい道になるのはわかっているが、教職実践演習だけはやる意味がないと思う。ほとんどの人が卒論の片手間でやっつけるという感がどうしてもでてしまって、有意義だったとはとても思えない
- 【64】指導案の書き方を実習前に丁寧に指導して欲しかった。生徒観や指導観などが実習中に書きにくかったのでそこも指導して欲しかった
- 【122】教育実習前の指導をもっと充実させてほしい
- 【165】実習に行く前の3年の2学期にしてほしかった
- 【167】3回生でやるのはダメなんですか？

<授業内容について>

- 【62】自分に足りない知識などを身に付けることができたので良かった
- 【144】ほかの学生と実習の学びや経験などについて共有することができたのは良かった
- 【3】全体で共有できることも有意義だが、人数が多いので個人的には不満を抱えている点は解消されなかった。全員が15回同じ授業を受けるのではなく、個別に面談的にやってほしかった
- 【5】発表(模擬授業)にフィードバックが追いついていなかったなので発表は2回せず、1時間に1グループで、その分のフィードバックの時間を確保すれば良いのでは。と思った
- 【93】もう少し学生同士のディベートがしたかった
- 【190】教育実習を終え、集大成としての授業なのに、指導案綴りや日誌を使用しないことに疑問を感じる
- 【17】学級経営についての講義(実践的なもの)がもっとあれば良かった
- 【140】学級経営について全体講義を受けたが、具体的な養護教諭の関わりについての話があれば良かった。(担任の視点から話す内容が多かったため)

<受講生について>

【2】 教員免許状を取って、将来教職にはつかない道を選んだ方々のことを私はそれぞれの道を尊敬したいし、教職で培ったことは必ず何かに活かせると思う。ただ残念なことの中には「免許を取れば良い」と考え、あまり班活動で協力的でない人も見受けられた。一人一人が責任を持って行える工夫を、教職実践演習の中でしていただきたい

【6】 教職に就きたい人と、免許の取得のみの受講生とで、授業の取り組む姿勢があまりにも違ったからグループでの活動がしんどかった。全員に負担のかかる、かつ逃げ道のない手法で授業をしてほしい。(教師を目指す後輩のために)

【11】 教員志望の人とそうでない人の温度差をすごく感じた。グループ活動はもっと教員の方から、全員がまじめにやらないといけないような状況や指導の評価をとってほしかった。やっている人とやらない人との温度差があって、ほかのグループの人からもそういった不満はよく聞いた。社会は一人一人が授業をすると聞いたので、そんな方法でも良かったかと感じた

<履修カルテについて>

【55】 履修カルテの無駄な作成、意味はあるのか？

【188】 履修カルテは、最終的にどうなるのか？

【190】 履修カルテの使い道が非常に不透明。ここに来て何のために書いていたのか意味を感じられない

(6) 教職課程全般について【全学】

教職課程全般について広く自由記述を求めたところ、以下のような意見が提出された。主要事項を要約すると、以下ようになる。

- 1) 時間割外に設定される事項が多く、その周知が掲示板によるのみであり、また遅い
- 2) カリキュラムの全体像が理解しにくい
- 3) 現場経験のチャンスが教育実習のみであり、非常に少ない。
- 4) 教育学部学校教育教員養成課程の学生と自分を比較しつつ、将来教職に就いて同等にやっていけるのか不安がある

<日程等について>

【1】 連絡全般について、もっとネットなどを使って授業の日程などがよりわかりやすくなるとありがたい

【3】 事前指導等、具体的な日程のアナウンスをもう少しはやくしてほしかった

【7】 時間が良くないと思う。総まとめとしてやるなら、実習直後の夏ごろから10月後に集中のような感じで詰めてやる方が良い。内容的に、終わってみて思うに、これだったら実

習前にしたほうが良い。あまり意味がない授業だと思う。5・6限と遅い時間だからといって、時間を延長されるのは困る

【9】教職関係の講義の日程がかぶりすぎ

【12】大学が一方向的に日時等(例：夏期休暇中のオリエンテーション等)を決め、しかもその時間しかないのに、いかなる理由(祖父の危篤など)でも遅刻・欠席を認めないのは厳しすぎると思う

【196】12月までの予定というのが卒研をしていると少しきついなって思うこともありました

【199】掲示板に掲示するだけだと注意していても見逃す恐れがあったり忙しかったりすると思います。教職関係の講義を1回でも逃すと取り消しになるので、KULASのメールなどで一斉に発信の方が親切なのかなと思いました

【97】日程の開示を早めにしてほしい

<カリキュラムについて>

【11】4年生になって急に教育実習が入りあたふたしてしまったので、希望者だけでも中学校に参観させていただけるような機会があったら助かった。教育学部ではなく人文学部のため、そういったイベントを設けて下さると嬉しい

【18】カリキュラムをわかりやすくしてほしいです。必要な単位を不足なく履修できるようなモデルを示すなど何かあれば良かったと思います

【101】4回生より3回生のときに教育実習に行きたかった

【76】免許状に関わる授業についてもっと詳しい説明がほしい(自分はアドバンスでありながら情報の免許をとろうとしているが免許に必要なため専門情報処理演習を二重履修した)

【151】教職入門ははじめに受けるべき教科だと思う

【190】教職課程を履修するうえで広い知識が欲しいのに、上限のせいで履修ができない、単位として認められない。正直、上限がすごくすごく邪魔です

【192】中等理科指導法Ⅰ・Ⅱを両方必修科目にすべきだと思う。(私はⅡのみしか履修しておらず、指導案を1度も書くことなく教育実習に望んだから)

<その他>

【8】4年間をかけて教師になる勉強をしてきたが、果たして教育学部卒業の教師とやっていけるのか不安がある

【62】教師としてだけでなく、人として成長する機会となったので良かった

【75】1~2年生のときに学習したことが忘れがち

【117】とても為になった

【194】化学科の学生にはハードすぎる。時間さえあれば楽しかったと思う。(意見交換ができ、県内外の実態を知れるので)

一方、教育学部学校教育教員養成課程(学教)の教職実践演習受講学生にあつては、どうであろうか。結果は以下のとおりであった。

(1) 教育実習の目的について【学教】

「これまでの教職課程の総仕上げ」45.2%(42)、「教科教育法の力量アップ」32.3%(30)、「教育実習の振り返りと総仕上げ」19.4%(18)であった。同課程以外の学部等の場合とは異なり、「教職課程の総仕上げ」であったとの回答が最も多い。

(2) 含めるべき事項について【学教】

いずれの項目にあつても8割以上が盛り込まれていた(十分+まあまあ)と回答している。【全学】と比較すると、事項2及び3に相違が見受けられ、学教において盛り込まれたとの回答率は高い。

含めるべき事項が授業にどれほど盛り込まれていたか?【学教】

事項	十分に盛り込まれていた	まあまあ盛り込まれていた	あまり盛り込まれていなかった	ぜんぜん盛り込まれていなかった	計
①使命感や責任感、教育的愛情	46.9(45)	43.8(42)	8.3(8)	1.0(1)	100.0(96)
②社会性や対人関係能力	38.5(37)	47.9(46)	12.5(12)	1.0(1)	100.0(96)
③幼児児童生徒理解や学級経営	46.9(45)	42.7(41)	10.4(10)	0.0(0)	100.0(96)
④教科・保育内容等の指導力	46.9(45)	51.0(49)	2.1(2)	0.0(0)	100.0(96)

(3) 教員スタンダードの若年前期項目について【学教】

高知県教員スタンダードの若年前期項目についてはどうか。大勢的に見ると、盛り込まれていた(十分+まあまあ)とする事項が多い。

取り分け、学習指導力に関わる事項番号15及び9については「十分に盛り込まれていた」(いずれも5割前後)と回答する学生が多い(「まあまあ盛り込まれていた」と合わせると8割~9割)。

一方、盛り込まれていたと回答した者が比較的少なかったのが、全学の場合と同じく27,39,40,43の4事項である。27,39,40,43はチームマネジメント力ないしはセルフマネジメント力に関わる事項であるが、他の事項に比べるとその学習は希薄であったということである。

それ以外の項目では、「まあまあ盛り込まれていた」との回答者が多い、あるいは複数の選

択肢で分散しているという結果であった。

教員スタンダード若年前期項目が授業にどれほど盛り込まれていたか？【学教】

事項	十分に盛り込まれていた	まあまあ盛り込まれていた	あまり盛り込まれていなかった	ぜんぜん盛り込まれていなかった	計
1.児童生徒の実態に応じた人間関係づくりや集団づくり	37.5(36)	54.2(52)	6.3(6)	2.1(2)	100.0(96)
2.児童生徒が安心・安全に過ごせる学級づくり	30.2(29)	45.8(44)	20.8(20)	3.1(3)	100.0(96)
3.児童生徒との積極的なコミュニケーション	31.3(30)	40.6(39)	24.0(23)	4.2(4)	100.0(96)
4.児童生徒に対する公平かつ受容的・共感的な関わり	44.8(43)	37.5(36)	16.7(16)	1.0(1)	100.0(96)
9.児童生徒の学習に対する意欲や興味関心を引き出す	58.3(56)	35.4(34)	6.3(6)	0.0(0)	100.0(96)
13.年間指導計画に位置づけられた教材の価値を捉えた教材研究	26.0(25)	30.2(29)	32.3(31)	11.5(11)	100.0(96)
14.学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえた学習指導案の作成	31.6(30)	44.2(42)	20.0(19)	4.2(4)	100.0(95)
15.発問・板書・机間指導の効果的な活用	58.3(56)	36.5(35)	4.2(4)	1.0(1)	100.0(96)
16.学習指導案や日々の授業計画に基づいた授業実践	35.4(34)	45.8(44)	14.6(14)	4.2(4)	100.0(96)
27.地域行事への参加、地域との連携	8.3(8)	16.7(16)	38.5(37)	36.5(35)	100.0(96)
38.うまくいかないことがあっても前向きに対応し続ける	22.9(22)	59.4(57)	13.5(13)	4.2(4)	100.0(96)
39.ストレス解消法	4.2(4)	15.6(15)	46.9(45)	33.3(32)	100.0(96)
40.健康的な生活習慣、自己の健康管理	5.2(5)	18.8(18)	42.7(41)	33.3(32)	100.0(96)
41.教育公務員としての服務規律、規範意識をもつての職務専念	13.5(13)	37.5(36)	30.2(29)	18.8(18)	100.0(96)
42.社会人としての常識（言葉遣い・マナー）	13.5(13)	50.0(48)	24.0(23)	12.5(12)	100.0(96)
43.仕事とプライベートの区別	8.3(8)	16.7(16)	43.8(42)	31.3(30)	100.0(96)
44.スケジュール管理、時間厳守	15.6(15)	43.8(42)	27.1(26)	13.5(13)	100.0(96)
45.悩みが生じた際には管理職や同僚に相談する	20.8(20)	39.6(38)	28.1(27)	11.5(11)	100.0(96)
46.教員としての役割、教育的視点に立った公正な判断	34.4(33)	49.0(47)	13.5(13)	3.1(3)	100.0(96)
47.管理職や同僚等の助言を謙虚に受け止め、自己成長につなげる	26.3(25)	51.6(49)	12.6(12)	9.5(9)	100.0(95)
48.チャレンジ精神、向上心、自己研鑽	43.8(42)	42.7(41)	9.4(9)	4.2(4)	100.0(96)
49.人権尊重、多様な価値観の尊重、人権意識	34.4(33)	40.6(39)	18.8(18)	6.3(6)	100.0(96)

(4) 履修カルテの活用について【学教】

「頻繁に活用した」は 1.0% (1)、「ときおり活用した」 15.6% (15)、「あまり活用しなか

った」35.4% (34)、「ぜんぜん活用しなかった」47.9% (46) であり、履修カルテはほとんど活用されていないという結果であった。

(5) 教職実践演習について【学教】

教職実践演習の満足度については、「非常に満足できた」39.6% (38)、「まあまあ満足できた」49.0% (47)、「あまり満足できなかった」11.5% (11)、「ぜんぜん満足できなかった」0.0% (0) であり、概ね受講学生は満足していると言ってよい。

教職実践演習について自由記述も求めたが、回答を要約すると次のとおりとなる。

- 1) 英語グループの新設、グループ構成人数の縮小、学校段階に基づくグループ分けを望む。
- 2) 発表時間や省察の時間がもっと欲しかった。
- 3) 受講学生に温度差がある。

<実習時期について>

【5】 応用実習中に教職実践演習があった。実習校やホームステイ先に迷惑をかけてしまったような思いがするため、被らないようにするか、被った場合に欠席をしても良いようにしてほしい。

<授業の枠組みについて>

- 【1】 英語科の授業がなかったのが不満であり、遺憾である。
- 【4】 小学校を主とした内容だったので、中学校や高校向けのコースもあれば、もっと充
- 【28】 学教の学生を5つのコースに分けるとなると、1つ1つのコースが大人数になり1人1人に合った課題解決も難しくなるので、初めに課題を書かせておいてから、課題や教科で分けるのが良いのでは?と思う。
- 【29】 小学校、中学校で分けたほうがいいのかもしい。
- 【41】 教育学部の教職実践演習に他学部のように英語の教科を設けてほしかった。
- 【70】 英語科、高校希望者に向けての内容も取り入れていただけたらありがたいです。
- 【3】 教職課程の総仕上げという意識はあまりありませんでした。授業のスキル向上になりました。
- 【9】 日頃、習うことができない先生から学べたことが良かった。
- 【42】 総仕上げにふさわしい。教壇に立つ前に受講できて良かった。
- 【8】 大人数のグループで指導案を作るとなると、どうしても活動しない人が出てくるので、全員が活躍できる人数調整を行った方がいいと思う。

<授業内容について>

- 【11】発表会については、もう少し、意義のある発表会にしてほしい。
- 【25】とても勉強になった。時期がもう少し違うときであれば、もっと良いと思う。
- 【26】教科における学習は非常に実りあるものだった。
- 【40】最後の報告会を、グループ形式のプレゼンテーションにしたら、教科や教職課程への深まりがもっとあるのではないかと思う。
- 【45】現場へ行く機会をもっと作ってほしい。
- 【51】発表時間がもう少し長い方がよかった。
- 【54】もう少し時間数があればもっとケーススタディなどで意見交換ができたと思います。
- 【63】受講生全員に授業する機会を。人数が多ければ結局、残念なことに何もしない人が出てきてしまう。
- 【69】学級経営について、「〇〇という場合についての対応策」だけではなく、「クラスを持ったときにどういう学級づくりを(先生が)されたか」ということについて学びたかった
- 【72】この授業は教職を希望しない人はとらなくてもいいと思いました。
- 【75】最後の振り返り(発表についての技能面の指導)からわかるように総仕上げという意味合いが薄い
- 【84】学級経営のことについて話し合う際、話すテーマが非常に多く、皆の意見が十分に聞けなかった。ので、話すテーマを数個に絞ったほうが良かった。
- 【85】もっと多くの方が授業できる方が良かったと思います。
- 【12】先生のお話(小ネタ、生徒への対応など)はとてもためになりました。しかし、特に学級経営についてですが、自分の課題について時間の問題もありあまり取り組めなかったのが残念です。
- 【60】最後の発表をどのように行えばいいかに関する説明に欠けていたと思う。
- 【67】時間が限られていたので、深めるということがあまりできていなかったと思う。模擬授業の授業数が多くて、1つにかける時間が少なかった。
- 【71】模擬授業やクラスでの様々な意見交換などを通し、自己課題などを新たに発見できた。
- 【73】実際に学校現場に行き、授業を見させていただいたり、1年目、2年目などの若い先生方の話を聴くことができ勉強になった。
- 【74】実践でチャレンジしたい方法などをたくさん教えて頂き、とても参考になりました。スケジュールの関係もあると思いますが、もっと先生のお話を聞いていたかったです。
- 【96】教員養成課程の授業で関わることが無かった先生方にご指導いただけただけなので、大変刺激になりました。実践的なお話がたくさん聞けてよかったです。

<受講生について>

- 【83】学生があまり意欲的に取り組んでいるように思えなかった。発表会はいろいろな意見が聞けて、勉強になったのでぜひこれからもやるべきだと思う。

【94】教職につかない人に対しては積極的に取り組みにくい。

(4) 教職課程全般について【学教】

出された意見は次のとおりである。実践的な授業を早期に取り入れてほしいとの要望等が挙っている。

【9】教職実践演習の時期を早めてもいいのではないか。

【1】早めに現場が見られるプログラムを取り入れるべき。1年生の時に学んだことが理論だけで実践とイメージしにくい

【11】もう少し実践的な授業を取り入れてほしい。

【29】色々試行錯誤（カリキュラム改革）しているみたいですが、2個下の学年の生徒からは混乱している様子です。免許、実習など。

【96】専門の授業を増やしてほしいです。

資料

平成26年度第2学期「教職実践演習」についてのアンケート<受講学生対象>

(全学の場合) 実施者：教職実践演習アドホック部会
(学教の場合) 実施者：学務委員会

教職実践演習を検証するための無記名式のアンケートです。成績評価には一切関係ありません。ご協力をよろしくお願いたします。

設問1. あなたの所属クラスあるいは所属グループを教えてください。該当する番号1つに○をしてください。				
(全学の場合) 1. 英語 2. 音楽 3. 家庭 4. 国語 5. 社会A 6. 社会B 7. 数学A 8. 数学B 9. 美術 10. 保健体育 11. 養護(医学部) 12. 理科A 13. 理科B 14. 理科C(農学部)				
(学教の場合) 1. 国語 2. 算数 3. 理科 4. 社会 5. 道徳				
設問2. 教職実践演習を受講し終えて、教職実践演習に対してどのようなイメージを持っていますか? 該当する番号1つに○をしてください。				
1. これまで教職課程で学んできたあらゆる事項の総仕上げ 2. 教育実習の振り返りと総仕上げ 3. 教科教育法に関わる力量の向上 4. その他 ()				
設問3. 全体として、以下に示す各事項は授業に盛り込まれていたと思いますか? 思いませんか? 該当する番号に○をつけてください。				
	十分に盛り込まれていた	まあまあ盛り込まれていた	あまり盛り込まれていなかった	ぜんぜん盛り込まれていなかった
①使命感や責任感、教育的愛情	4	3	2	1
②社会性や対人関係能力	4	3	2	1
③幼児児童生徒理解や学級経営	4	3	2	1
④教科・保育内容等の指導力	4	3	2	1
設問4. 全体として、以下に示す各事項は授業に盛り込まれていたと思いますか? 思いませんか? 該当す				

る番号に○をつけてください（番号の意味は設問3に同じ）。				
①児童生徒の実態に応じた人間関係づくりや集団づくり	4	3	2	1
②児童生徒が安心・安全に過ごせる学級づくり	4	3	2	1
③児童生徒との積極的なコミュニケーション	4	3	2	1
④児童生徒に対する公平かつ受容的・共感的な関わり	4	3	2	1
⑤児童生徒の学習に対する意欲や興味関心を引き出す	4	3	2	1
⑥年間指導計画に位置づけられた教材の価値を捉え、教材研究を行う	4	3	2	1
⑦学習指導要領と児童生徒の実態を踏まえた学習指導案の作成	4	3	2	1
⑧発問・板書・机間指導の効果的な活用	4	3	2	1
⑨学習指導案や日々の授業計画に基づいた授業実践	4	3	2	1
⑩地域行事への参加、地域との連携	4	3	2	1
⑪うまくいかないことがあっても前向きに対応し続ける	4	3	2	1
⑫ストレス解消法	4	3	2	1
⑬健康的な生活習慣、自己の健康管理	4	3	2	1
⑭教育公務員としての服務規律、規範意識をもつての職務専念	4	3	2	1
⑮社会人としての常識（言葉遣い、マナー）	4	3	2	1
⑯仕事とプライベートの区別	4	3	2	1
⑰スケジュール管理、時間厳守	4	3	2	1
⑱悩み等が生じた際には管理職や同僚に相談する	4	3	2	1
⑲教員としての役割、教育的視点に立った公正な判断	4	3	2	1
⑳管理職や同僚等の助言を謙虚に受け止め、自己成長につなげる	4	3	2	1
㉑チャレンジ精神、向上心、自己研鑽	4	3	2	1
㉒人権尊重の精神、多様な価値観の尊重、人権意識	4	3	2	1
設問5. 教職実践演習において『履修カルテ』（「追加シート」以外の部分）を活用しましたか？ 活用しませんでしたか？ 該当する番号1つに○をつけてください。				
1. 頻繁に活用した 2. ときおり活用した 3. あまり活用しなかった 4. ぜんぜん活用しなかった				
設問6. あなたの進路希望についてお教えてください。該当する番号1つに○をつけてください。				
1. ぜひとも教職に就きたい 2. できれば教職に就きたい 3. 教職とともに別の道も考えている 4. 教職以外の道を希望している				
設問7. 教職実践演習は満足できるものでしたか？ 満足できるものではありませんでしたか？ 該当する番号1つに○をつけてください。				
1. 非常に満足できるものであった 2. まあまあ満足できるものであった 3. あまり満足できるものではなかった 4. ぜんぜん満足できるものではなかった				
設問8. 教職実践演習について、何かご意見がありましたら、以下にご記入ください。				
設問9. 教職実践演習を含む本学の教職課程全般について、何かご意見がありましたら、以下にご記入ください。				

【C】教職実践演習はどのように捉えられているのか？

今回の教職実践演習（全学）の検証作業は、「高知県の教員スタンダード」との整合性をみることを主眼としている。そういうわけで、教職実践演習を受講し、かつ高知県の学校現場に従事している卒業生に対しても面接聴取調査を実施し、現場経験を通して振り返った教職実践演習を明らかにすることとした。

【C-1】受講経験あり現場教員に対する面接聴取調査【全学】

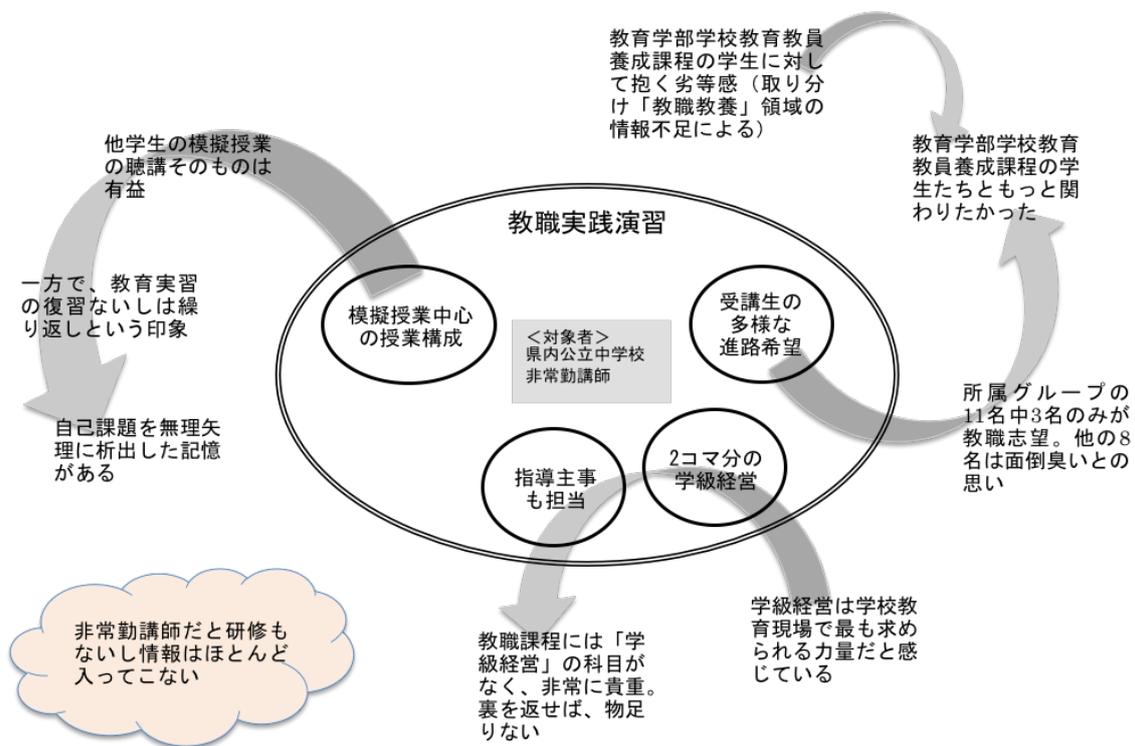
全学の教職実践演習を受講し、なおかつ現在学校教育の現場に従事している 2 名に対して、面接聴取調査を行った。両者は平成 25 年度に教職実践演習を履修した卒業生であり、1 名は高知県内の公立中学校で非常勤講師をし、1 名は高知県内の公立高等学校で常勤講師をしている。

聴取事項は以下のとおりである（但し、時間の都合上、十分に聴取できなかった事項もある）。

- (1) 現在の肩書き
- (2) 現在の業務内容
- (3) 新任教員として現場から求められていると感じる資質・能力について
- (4) 教職実践演習に対するイメージについて
- (5) 教職実践演習の目的について
- (6) 教職実践演習の内容について（「教員スタンダード」を活用して聴取）
- (7) 教職実践演習の効果について（「教員スタンダード」を活用して聴取）
- (8) 教職実践演習と現場とのつながりについて
- (9) 教職課程カリキュラム全体についてのイメージについて

県内公立中学校非常勤講師に対する聴取から得られた回答を要約すると、以下のとおりである。

- ①模擬授業中心の授業構成は一定の意義（同級生の授業を見ることができる等）があるが、教育実習の復習・繰り返しの感があるのは否めない。
- ②現場に出て学級経営に関わる力量の必要性を強く感じるが、この点、教職実践演習を含む教職課程のカリキュラムにおいて充実させた方が良いのではないか
- ③多様な進路希望を持つ受講学生がおり、弊害を感じることもある。
- ④教育学部学校教育教員養成課程のカリキュラムに比べると、同課程以外の学部等の教職課程カリキュラムは手薄に感じるところであり、同課程の学生と自分とを比較したときに、様々な側面で不安を感じる。
- ⑤非常勤講師は研修などもなく、各種の情報がほとんど入ってこない。



また、県内公立高等学校常勤講師に対する聴取から得られた回答を要約すると、以下のとおりである。

- ①現場で求められていると感じるのは「授業をする力」である。取り分け、児童生徒の言語活動の充実をどのように図っていくのかという点が重要である。
- ②学級経営の授業は非常に印象に残っている。
- ③模擬授業中心の授業構成であったが、同級生の授業を見ることができ、非常に良い機会であった。
- ④県教育センターの指導主事の先生方から指導を受けることができたのは、県就職を希望する自分にとっては、大変プラスであった。
- ⑤教育学部学校教育教員養成課程のカリキュラムをうらやましいと思うことがあった。
- ⑥現在、様々な研修に参加することもあり、各種の情報は取得できている。

8. 教職実践演習の再構成に向けて

本調査研究では、その本来的な主旨や高知県の教員スタンダード、あるいは文部科学省のいう含めるべき事項等の視点から、教職実践演習を検証することを目的とした。

具体的には、【A】教職実践演習は実質的にどのように遂行されているのか、【B】教職実践演習はどのような効果を上げているのか、そして、【C】教職実践演習という授業はどのように捉えられているのか、という3つの点について、授業担当教員や受講学生、現職

の卒業生に対してアンケート調査や面接聴取調査を実施し、実態を明らかにしようとした。

主要な結果を要約すると、以下ようになる。なお、学教とは教育学部学校教育教員養成課程を指し、全学とは学教以外を指す。

【A】教職実践演習はどのように遂行されているのか

- (1) 教科別にクラスないしはグループが編成され、基本、クラス・グループ単位での授業となっている。
- (2) 授業は、自己課題の明確化、模擬授業、授業参観（学教のみ）、学級経営（学教はケーススタディ、全学は講義）、自己課題の再確認、で構成されている。
- (3) 学教は教育学部の実務家教員及び長期の現場経験のある非常勤講師がそれぞれクラスを担当し、全学は教育学部の教科教育専門教員等と高知県教育センター指導主事とが原則ペアを組んでクラス・グループを担当している。
- (4) 授業担当教員は、教職実践演習の目的を「4年間の教職課程における学びの総仕上げ」であると認識している。
- (5) 授業担当教員により、教科の特性等に基づいて、班構成の工夫や講義時間の確保、省察活動の工夫等がなされている。
- (6) 模擬授業中心の授業構成ではあるが、授業参観や学級経営に関わる時間が設けられていることもあり、含めるべき事項（①使命感や責任感、教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児児童生徒理解や学級経営、④教科・保育内容等の指導力）については、いずれにおいても5割を超える教員が盛り込めたと回答している（取り分け④の回答率は高い）。
- (7) 高知県の教員スタンダード若年前期項目について、授業担当教員は学習指導力や学級経営力に関わる事項については盛り込めたとの回答が多かった。一方、セルフマネジメント力に関わる事項については、一部を除き、盛り込めなかったとの回答が多い。
- (8) 履修カルテについては、教員は学生に対する指導・評価の際に用いている。受講学生が日常的に有意義に活用できているかという点については疑問である。
- (9) 初回授業で受講学生が明確化していく自己課題については、学習指導力に関わる事項が多い。学教と全学とを比較してみると、前者においてより具体的な自己課題を立てている印象である。

【B】教職実践演習はどのような効果を上げているのか

- (1) 学教では「4年間の教職課程の総仕上げ」と捉えている受講学生が最も多く、全学では「教育実習の総仕上げ」と捉えている受講学生が多い。
- (2) 「①使命感や責任感、教育的愛情」、「②社会性や対人関係能力」、「③幼児児童生徒理解や学級経営」、「④教科・保育内容等の指導力」について、受講学生は概ね授業に盛り込まれていたとしているが、「十分に盛り込まれていた」との回答は、④を除いて、

学教の受講学生において多い。

- (3) 高知県の教員スタンダードの若年前期項目のうち、学習指導力に関わる事項については、盛り込まれていたとの回答が多い。しかし、そのうち、「十分に盛り込まれていた」との回答者が多い事項は全学において多い。一方、学習指導力に比べるとセルフマネジメント力に関わる事項については、盛り込まれていたとの回答は少ない。
- (4) 教職実践演習における履修カルテの活用程度は低い。
- (5) 教職実践演習に対する満足度は総じて高い（学教でも全学も「まあまあ満足できた」が最も多い）。
- (6) 教職実践演習について、「十分な省察ができなかった」、「受講学生に温度差がある」との意見は学教・全学いずれにおいても見られた。これに加え、全学では「教育実習前に履修したかった」、「履修カルテの意義が見いだせない」、学教では「現行とは異なるクラス・グループ構成を望む」との意見が見られた。
- (7) 教職課程全般について、「もっと早い時期から現場経験をさせてほしい」との意見は学教・全学いずれにおいても見られた。これに加え、全学では「時間割外の説明会やオリエンテーション等が多く、その周知も遅い」、「教職課程のカリキュラムの全体像が把握しにくい」、「学教との差を感じる」などの意見があり、学教では「専門の授業を増やしてほしい」との意見があった。

【C】教職実践演習はどのように捉えられているのか

<非常勤講師から出た意見>

- (1) 教育実習の復習・繰り返しの感があるのは否めない。
- (2) 現場では学級経営力の必要性を強く感じるので、学級経営に関わる時間をもっと増やした方が良い。
- (3) 受講学生に温度差があった。
- (4) 学教のカリキュラムとの差を感じていた。

<常勤講師から出た意見>

- (1) 現場では授業力、取り分け「児童生徒の言語活動の充実をいかに図るか」という点に関わる事項が求められている。
- (2) 模擬授業の実施や学級経営に関わる講義は有意義であった。
- (3) 県教育センター指導主事の先生方による指導は、県内での教職を目指す自分にとっては大変プラスだった。

かなり大雑把ではあるが、本調査研究から析出された事項を以上のようにまとめてみた（次頁も参照のこと）。

高知大学における教職実践演習の構造の一端

<教職実践演習の授業構成>

教員：学教は教育学部実務家教員及び長期現場経験のある非常勤講師、全学は教育学部教科教育専門教員及び高知県教育センター指導主事

目的：4年間の教職課程の総仕上げ

内容①：自己課題の明確化、模擬授業、授業参観（学教）、学級経営（学教はケーススタディ、全学は講義）、自己課題の再確認

内容②：含めるべき事項（①使命感や責任感、教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児児童生徒理解や学級経営、④教科・保育内容等の指導力）は5割を超える教員が盛り込めたとの回答

内容③：高知県の教員スタンダード若年前期項目について、学習指導力や学級経営力に関わる事項については盛り込めたとの回答。一方、セルフマネジメント力に関わる事項については、一部を除き、盛り込めなかったとの回答

内容④：全学では・国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』及び文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～』必携

方法：教科別のクラス・グループ編成

カルテ：学生に対する指導・評価の手がかりとしている

学生の自己課題：学習指導力に関わる事項が多い。学教の受講学生の方がより具

<受講学生の認識>

印象：学教では「4年間の教職課程の総仕上げ」、全学では「教育実習の総仕上げ」との回答が多い

内容①：十分な省察ができなかったとの意見あり。全学では教育実習前に履修したかったとの意見あり

内容②：含めるべき事項（①使命感や責任感、教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児児童生徒理解や学級経営、④教科・保育内容等の指導力）は概ね盛り込まれていたとの回答。但し、④を除いて、学教で「十分に盛り込まれていた」との回答多い

内容③：高知県の教員スタンダードの若年前期項目のうち、学習指導力に関わる事項は盛り込まれていたとの回答多し。但し、「十分に盛り込まれていた」との回答が多い事項は全学で多い。一方、セルフマネジメント力に関わる事項は盛り込まれていたとの回答は少ない

方法：現行とは異なるクラス・グループ編成（学校段階別等）を求める意見あり。受講学生に温度差があるとの指摘あり

カルテ：活用の程度は低い。カルテ作成の意義が見いだせないとの意見あり

満足度：満足度は総じて高い

その他：教職課程全般について、「早い時期からの現場経験」を望む声あり。全学は学教に対して教職教養の面で、学教は全学に対して専門の面で差を感じるとの意見あり

<現場からの声>

- ・現場では、授業力、言語活動の充実、学級経営力が求められていると感じる
- ・教職実践演習は、教育実習の繰り返し／有意義だった
- ・当ても受講学生に温度差があった
- ・県教育センター指導主事の先生方による指導は、県内での教職を目指す自分にとって有意義だった

—教職実践演習の再構成に向けて—

最後に、本調査研究の結果から、その本来の目的や高知県の教員スタンダードの視点から教職実践演習を再構成していくにあたって、検討していかなければならない事項について簡単にではあるがまとめておく。

(1) 教職実践演習の目的について

取り分け、全学の受講学生にあっては「教育実習の総仕上げ」との認識が多くあった。事前のオリエンテーションで説明を受けてはいるものの、学教のような授業参観や学級経営に関わるケーススタディなどがなく（学級経営については講義のみ）、模擬授業のみがクローズアップされることによるのであろう。もっとも、模擬授業を教職実践演習の軸に据えること自体は何ら問題ないと考える。問題は、模擬授業を手段として用いる教職実践演習を、その本来の目的に基づいてどのように進めていくのかという点にある。この点は、次項に記す「省察」のあり方に関わっているように思われる。

(2) 教職実践演習の内容について

既述のとおり、教職実践演習とは、「教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される」のである。

したがって、教職実践演習の中核となるのは学生による「省察」活動である。しかし、全学に比べると多様な内容を盛り込み、教職実践演習とは「4年間の教職課程の総仕上げ」との認識を持っている受講学生が多い学教であっても、「省察の時間が十分ではなかった」との意見が出されている。「省察」活動をどのように組み込んでいくのかが大きな課題となってくる（次項参照）。

もっともその省察活動の際には、高知県の教員スタンダードの若年前期項目が指標となりうる。取り分け、セルフマネジメント力に関わる事項をどのように組み込んでいくのかは検討していかなければならない。

(3) 教職実践演習の方法について

クラス・グループ編成に関わる受講学生からの意見があった。現行の教科別とは異なるものを希望するものである。クラス・グループ編成については、福井大学教育学部の教職実践演習での取り組みがユニークである。時間割を調整のうえ、全学年全コースの学生を一堂に集め、異学年・異コースのグループを構成させ、そこで省察活動に取り組みせてい

る。4年生の省察活動を下の学年が支えていくのである。もちろん、下の学年の学生にとっては自分の将来の見立てにとって有意義である。こうした取り組みの背後には、異質性の効用についての一定の考えがある（現に効果もあるとのこと）。こうした視点は、本学の教職実践演習を再構成していく際に参考になるのではないかと（参考資料：遠藤貴広 2014「教員養成カリキュラム改革実践の批判的省察—省察の深さとその評価をめぐって—」教師教育研究 Vol.7, p163-183）

また、受講学生の温度差についての指摘があるが、これは教職実践演習の授業方法の問題というよりは、教育実習有資格者や教職実践演習有資格者の判定に関わる問題である。

（４）履修カルテについて

学生における履修カルテの活用の程度は総じて低かった。これについては、さまざまな視点から考えることができるだろう。例えば、

- ①本学の履修カルテの内容構成にとくに問題はないのだが（学生の省察活動にとって有益な内容構成となっているのだが）、その運用方法（意味づけ・意義づけ、周知の方法、活用方法など）に問題がある。
- ③本学の履修カルテの内容構成が、そもそも学生の省察活動にとって有益な内容構成となっていない。

履修カルテの問題は、そもそも、本学が学生たちにどのように省察活動をさせたいと考えるのかという点に依存している。紙面上の問題ではなく、授業やカリキュラムに関わる問題である。

（５）教職課程全般について

取り分け、全学においては、今回の調査で得られた意見以前に、現場経験の少なさに対する不満は耳にするところであった。取り組むべき重要な課題である。

また上記（２）で、高知県の教員スタンダード若年前期項目のセルフマネジメント力に関わる事項について触れたが、教職実践演習でそうした事項について省察していくためには、それに関わる学習経験や現場経験が必要である。高知県の教員スタンダード若年前期項目に関わる内容を教職課程全体においてどのように配置していくのかを検討していく必要がある。

最後に、学教と全学の受講学生が互いに対して感じている「(いろいろな側面での) 差」についての意見があったが、この点については、カリキュラムの検討とともに、「省察活動を協働して行う」ということができれば解消されるのではないかと。

（第２章 横山 卓）

第3章 調査研究Ⅱ 高知県教育委員会との連携・協働による県内教員就職者への継続的・体系的なフォローアップシステムの構築に向けた検討

<本章の構成>

1. 調査研究の目的
2. 本学卒業生における県内教員就職者へのニーズ調査
3. 先進的事例の収集・調査
4. 全体のまとめ

1. 調査研究の目的

高知県において正規教員として採用された高知大学教育学部卒業生（以下、卒業生）に関しては、初任者研修等を通じた教職キャリアおよび資質・力量形成の機会が充実しているほか、現在、高知県教育センターを中心として、初任者研修の抜本的な改革に向けた取り組みが推進されており、今後さらなる充実が図られることが見込まれている。一方、非正規教員の場合は、こうした教職キャリアおよび資質・力量形成の機会には十分に恵まれていないといった課題があり、特に本学のフォローアップを強化していく必要がある。

つまり、高知県における養成・採用・研修の一体化の充実に資する学び続ける教員を支援するフォローアップシステムの構築に向けて、それに対するニーズやシステムに求められる要件を明らかにすることが不可欠である。具体的には、正規教員および非正規教員を含む県内教員就職者に対する聞き取り調査等を実施し、卒業後のフォローアップへのニーズおよびその相違点を明らかにする必要がある。こうした調査結果をふまえた上で、学び続ける教員を支援するフォローアップシステムの構築に求められる要件およびそこでの大学と教育委員会との連携／協働、役割分担の具体的なイメージを検討する。

以上をふまえ、高知県における養成・採用・研修の一体化の充実に資する学び続ける教員を支援するフォローアップシステムの構築に向けて、それに対するニーズやシステムに求められる要件を明らかにするために、以下の5点に関して調査研究を行う。

- ①高知県に正規教員として就職した卒業生を対象とした聞き取り調査を実施し、大学に期待するフォローアップの具体的な内容や実施方法に関するニーズを明らかにする。
- ②高知県に非正規教員として就職した卒業生を対象とした聞き取り調査を実施し、大学に期待するフォローアップの具体的な内容や実施方法に関するニーズを明らかにする。
- ③上記①、②に関する聞き取り調査の結果を比較検討し、相違点を明らかにすることで、正規・非正規教員を含む本学卒業生の多様な教職キャリア形成に資するフォローアップシステムの構築に求められる要件を明らかにする。

- ④上記①、②、③に関するより多面的な検討を実現するために、卒業生および修了生へのフォローアップシステムをすでに構築・運用している先進的事例の収集につとめ、大学および教職大学院担当者への聞き取り調査を実施する。
- ⑤上記①、②、③、④を総合的に検討し、教員スタンダードの視点に立ったフォローアップシステム構築にむけた案を策定する。

2. 本学卒業生における県内教員就職者へのニーズ調査

(1) 調査の対象

過去5年以内に本学教育学部を卒業し、県内において教職に就いた5名（以下、A、B、C、D、E氏／常勤・非常勤講師を含む）を対象とした。5名のプロフィールについては、表3-1の通りである。なお、ここでの教職歴とは、平成26年度現在（調査実施時点）のものである。

表3-1 調査対象者5名のプロフィール

	教職歴	採用までの経緯／講師歴等の詳細	校種
A	3年目	新卒採用	中学校
B	4年目	非常勤講師1年、常勤講師1年含む	中学校
C	1年目	常勤講師9ヶ月	中学校
D	1年目	常勤講師9ヶ月	小学校
E	2年目	常勤講師1年7ヶ月	小学校

A氏は、大学卒業と同時に採用され、現在教職歴3年目であり、現在の勤務校（中学校）は2校目である。B氏は、大学卒業後1年間は非常勤講師、その次の1年間は常勤講師を務めていた。その後、採用となっている。現時点で教職歴4年目であり、採用後は、現在の勤務校（中学校）に勤めている。C氏は、教職歴1年目であり、常勤講師として、中学校の特別支援学級の担任をつとめている。D氏もまた、教職歴1年目であり、常勤講師として、小学校の特別支援学級の担任をつとめている。E氏は、大学卒業後、現在に至るまで1年10ヶ月の間、常勤講師として小学校につとめている。

調査対象の選定にあたっては、すでに正規採用となっているA氏およびB氏と現在、常勤講師としてつとめているC、D、E氏を比較することにより、両者を取り巻く環境等を比較することを試みることを可能になると考えた。

(2) 調査の方法

平成26年11月から12月にかけて、上記5名の対象者に対して、以下の内容について聞き取りを行った。

- ①大学卒業後から現在に至るまでに、教職において感じた課題意識や身につける必要性

を感じた資質力量

②上記①を解決するために役立った機会、場所、人

③上記①に関わって、大学に期待していること（その有無および具体的内容）

聞き取り調査は、半構造化インタビューの形式において実施した。インタビューに要した時間は、約 49～78 分であった。データ分析に際しては、まず、インタビューの音声データをプロトコル化した。その後、5 名分の文字データを比較することにより、そこにみられる特徴や相違点を整理した。

（3）結果

①大学卒業後から現在に至るまでに、教職において感じた課題意識や身につける必要性を感じた資質力量

卒業生 5 名が、教職に就いた後に感じた課題意識およびそれに言及した発言については、表 3-2 のようにまとめられる。

5 名いずれの場合においても、彼らが置かれた状況や接している子ども、そして、学校や学級の状態、仕事の内容に影響されるかたちで課題意識が生じているものと考えられる。加えて、C 氏や D 氏に顕著であるように、講師として配属された学校において任された学級や仕事内容に応じて、課題意識が生じていることも確認された。これについては、A 氏にはみられなかった点であり、非正規教員として配属される際に特徴的な状況であるように思われる。

また、学級経営や保護者との関わりに関しては、大学において十分に学ぶことができているという意見（そもそも、それらについて、大学で十分に学ぶこと自体が難しいのではないかというものも含めて）が聞かれた。例えば、それは、以下のような発言にあらわれている。

- ・絶対、保護者との関わりはやってみないとわからないですよね。（中略）やって失敗して「あー、こうじゃいかんかったんだな」とか、ほとんどの場合が子供に対する関わり方であったり、「子供も楽しそうにしてるから」とか「一生懸命にやってるからそれでいいか」という風に思ってしまうと大多数のことしか見えてなくて、少数の頑張れない子どもとか、頑張っているふりはしているけどしんどい思いをしてい

表 3-2 教職において感じた課題意識・必要性を感じた資質力量

	課題意識	左記について言及している発言
A	子どもとの関わり方	・自分の場合は、 子どもとの関わり方 のところが一番大きかったなというのは思います。（中略）学校現場に出てもそれだけ（授業力）だとやはり子どもはこちらを向いてくれないし、ついてきてくれ

		ないので、子どもを理解するとか子どもの話を一旦聞き入れるとか、そういうところがやはり自分は難しかったなという風に思いました。
B	子どもの成長に対する見通しを持つこと	<ul style="list-style-type: none"> 最初の1～2年目は、今もそうですけど目の前にことに対応するという、ほんとにもう「目の前、目の前」となってしまっ、先を見て「彼らがどういう姿で卒業していくのか」とか「どんな大人になっていくのか」というところのゴールイメージを持って、自分が指導しているということがほとんどないと思うのです。特に講師だとその1年間関わって「はい、さようなら」というような状態になってしまうので、あまり先を見通して「何が今必要なのか」「この時まで何を身につけさせたいのか」というような具体的なイメージが自分の中に持っていないのです。
C	特別支援教育の方法・カリキュラム	<ul style="list-style-type: none"> 社会教えるのかなと思っていたら、「特支やってね」と言われて。(中略) どうすればいいのかわからなかったです。(中略)「どんなカリキュラムなのか」とか「どういう時間割の組み方なのか」というのも他の先生方もわからない状態なので、自分で1から調べて「こういうのがあって、こういう教科があって、こういう時間割の決め方して」というのも調べてやらなければいけない状態だったので。
D	特別支援教育の方法・カリキュラム	<ul style="list-style-type: none"> 社会科だけで、社会科の免許も二種までしかもっていないので。小学校の免許取って二種取った身なので特支のことも全然。(中略)「ん？」と思ったけれど。
E	授業力、学級経営力、子どもとの向き合い方	<ul style="list-style-type: none"> 本当に何も分からないまま放り込まれて、自分に何が足りないか分からないまま子どもたちと向き合っ、日々の授業もやらないといけないという状況でした。授業力も当然そうですし、学級経営力、子どもの向き合い方、指導の仕方という、そういう細かいところも全く何も無い状況で入ったので。

る子どもとかいうところが見えてこなくなってしまう、全体のことばかり見ていると。結局、少数の部分から「あの先生の言うことわからん」とかいう声も聞こえてきたりもしていたので、やはりそんなことまでも**実際見てみないと、やってみないとわからない**です。失敗しないとわからないと思います。(B氏)

- やはりほんとに自分だって**保護者対応**というのは初めてで、しかも**特支**というので「親ってどんな人なんだろう?」とか「**どんなこと言えばいいんだろう?**」とかいうのは悩んだのですけど。(中略) 本当、最初は「**保護者対応?**」と思いましたが、今はそんなに苦になっていないし、そうしないといけないと。子どもたちの学力とか生活

面が向上していかないので、今は積極的に、本当に各保護者と関わってという状況です。(D氏)

- ・今年もそうなのですが、やはり学級経営ですかね。授業は、それこそメソッドなどは、今行っているようなお話のなかでもらえるのです。教材研究に正解があるかないかと言われたらそれも正解はないのですが、それ以上に正解が見えないのが学級経営だと思います。(中略) 授業づくりと違って、特に学級経営に関しては、言い方は悪いですけど高知大はどうしても薄いので、そこで苦労はしました。(E氏)

大学において、学級経営についての学びが十分になされていると学生(卒業生)が認識していないという点については、前章においても言及されている。この点については、前章で取り上げた教員養成カリキュラムの検証という観点からも、喫緊の課題であろう。

②教職における課題意識等を解決するために役立った機会、場所、人

上で取り上げた課題に対して、それらを解決するために役立った人については、表3-3に示したような回答が得られた。

5名いずれも、上述した課題意識を解決するために役立った人として、同僚を含む学校内の人材を挙げている。例えば、B氏が「目の前で同じ生徒の実態を見ている特に経験値のある先生」に言及しているように、自らの実践の状況について理解あるいは共有している人材に相談等をしている様子が確認された。この点については、5名いずれにも共通している。

また、課題意識等を解決するために役立った機会についても、学内における学習機会を挙げているという点が、5名に共通していた(表3-4)。具体的には、校内研修会や学内における同僚間での意見交換である。これは、常勤講師としてつとめている(つとめた経験をもつ)4名も、同様に回答していた。今回の調査対象のうち、講師としての経験を有する4名はいずれも、他の教員と変わりなく、校内研修に参画することができると述べている。それは、例えば、以下のような発言にあらわれている。

表 3-3 課題意識等を解決するために役立った人

	役立った人	左記について言及している発言
A	同僚、指導教員	・不安はありましたけど、やはり 指導教諭 の方が「それでいい」ということをすごく話されて、(中略) すごく力のある方だという風に伺ってその方のもとで自分も2年間ご指導いただいて、「授業の仕方とか、子供を落ち着かせるというのはすごくできている」と。あとはこちらが子どもをどういう風に向かせたらいいかとかという話をたくさんいただきました。教材を作ったりとか何か物を作るというのも1つの手段だということもいただいたので、そういうところでまたアドバイスいた

		<p>いたことを実践してやってみるということを繰り返していたので、授業力はあまり困らなかったというのありました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年次になってその子が3年生になった時に、自分がその子のクラスの副担任になって、その担任の先生のやり方を見ていたら、授業をしているけど型にはめるといよりも「やらんがやったらえいき」という感じのスタイルで接していたので、こういう風にしてでもその子は「えいき」と言われても「はあ？」と言いながらもきちんといたので、お互いがとれてるし「この方うまいな」と正直思いました。 ・先ほど話した3年の担任の先生なんかも「もう自分が思った通りにやってみいや」と後押ししてくださるので、やってみて子どもの反応をこうやったということを伝えると「うん、そうやと思うよ」ということをあっさり言われるので、「じゃそこからどうしたらいいと思う？」というのをすごく話もしてくださって、それがやはり実地の研修ですよ。
B	管理職、同僚	<ul style="list-style-type: none"> ・管理職の先生にも相談させていただいたこともあるし、同じ講師であった先生とか、採用になって間もない先生とか。ベテランの先生はちょっと採用試験の形が違ったりということがあったので、「俺らの時はこうやったけど、今は違うきね」とかいう話もされたりで、そんなことをいろいろと勉強させてもらいました。 ・同僚の先生、今もそうなのですが、ほとんどが同僚の先生です。やはり、目の前で見ている生徒の実態が違う先生だと、どうしても話をしていると「そうじゃないんだけどな」と思ってしまうところもあって、それは自分の引き出しの中に持っておいたらいいことだと思うのですが、目の前で同じ生徒の実態を見ている特に経験値のある先生だと先を見通して「今はそこまでしめる時じゃない」とか「今、ここはやっとかないかん時や」というメリハリをすごくつけられているので、そういう話を聞きながらやっています。
C	管理職、同僚、養護教諭、スクールソーシャルワーカー、心理カウンセラー	<ul style="list-style-type: none"> ・主に頼る人は管理職...、あとまあ養護教諭の先生にも相談したりとかはしていました。 ・その時やはりベテランの先生方がたくさんいらっしゃるの、自分から聞きに行ったりもあるし、困っている状況も察してくれて管理職の教頭先生からは「こうしたらいいよ」とか言ってもらえたりとか、先ほどの授業のことは昔、自分と同じ年代の時に、特別支援を要する子をもっていた先生もいらっしゃったので、「こうやってみたらいいんじゃない」とか、具体的ではないにしてもアドバイスはしてもらっている状況です。 ・管理職の先生から「ちょっとこれ、こうやってみたら？」とかいう意

		見ももらし、地域の行事とか関わりが多いので「そういうのも積極的に参加しーよ」という風に言われたりとかして、もうほんとに入り込むすきをたくさん与えてくれるのでかなり勉強にはなっています。自分の持っているクラスがいろいろ大変なので、 スクールソーシャルワーカー の人も来られているし、 心理カウンセラー の人もいるのでいろいろな方面から情報はいただいて「これはこうしたらいいよ」とか「こうした方がいいんじゃない」とか、自分の意見も言って「あ、そうだね」とかいう意見の交流とかもかなりできているので、校内研以外でもそういう日常の中での勉強がかなりあると自分は思っています。
D	同僚	・初めは「これはどう返せばいいですか？」というのを、 普通の隣のクラスの1年団の先生 に聞いたり、それでも「んー？」ってなったら 特支の先生 に聞いたりですね。(中略)自分の判断で行動したら絶対失敗するので、ひたすら周りにいる先生、頼れる人は頼っていました。
E	管理職、同僚、 学力向上支援員	・ 管理職の先生 や 周りの先生 といろいろと話し合いながら、保護者の方ともやりながら、手探りでというかたちです。 ・ 学力向上支援員 ということで、支援員の先生が入っていました。その方が結構経験のある方で、かなり相談させていただきました。

表 3-4 課題意識等を解決するために役立った機会

	役立った機会	左記について言及している発言
A	校内研修会	・ 校内研 は、主には授業のことですね。で、その方の授業をやるのだったら「もっとこうした方が良かった」とか「でも、こういうところは良かった」とかというようなことですね。
B	同じ教科の教師との話し合い	・どうしても教材研究で夜遅くまで残るのは 数学の教員 が多いので、集まって話をしたりします。今、高知県の学力問題で「特に数学のB問題が弱い」とかいう指摘を受けているので、そこに対応できる問題作りとか、うちの学校の場合だと小勉強時間に数学の勉強をしたりすることが多いので、そういう問題とか、授業中に取り組む問題とかを作ったりしている中で、「どういう風に進めていったらいいのか」とかいう話はします。
C	校内研修会	・ 校内研 もいろいろあって、講師の人を呼んで先生だけの研修だったりとか、授業をやられている先生を見て事後研だったりとか、そんな感じなのですけど。やはり一緒ですね。すべての先生が1回授業を公開しないとイケなくて、自分も確認してないですけど多分講師もやらないとイケないと思うのですけど。 ・今のところやっていなくて、でも1人1人の先生がやって事後研はす

		<p>るという、その中学校のスタンダードではないですけど、が出来上がっていて、それにも入っていたり。</p>
D	<p>校内研修会、学年ブロックでの研修</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全校研、まあ研修で言うと言われたみたいに講師と呼ばれるものがあるって、授業研がある。授業研もブロックごとに低、中、高、特支とあってそこで1人誰か代表ではないですけど、その人は低で1人全校研、中で1人全校研、高で1人全校研でブロックの中でもブロック研というのがあって、テーブルでブロック研をしたらそのブロック研はテーブル全員見に行く、中ブロックで見に行く、特支ブロックで見に行く。
E	<p>校内研修会、学年ブロックでの研修、公開研究会、学外での勉強会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研というかたちで、授業研が何回かありました。その学校は、1学年1クラスの単学級でした。低学年、中学年、高学年でブロックを組んでいて、そのブロックのなかでのブロック研というかたちでの研究授業や、それについての意見交流はありました。1年目は本当に忙殺されていたので、学級経営などに関する研修のようなものにはほとんど行けませんでした。 ・ブロック研では2回、算数と道徳をやりました。 ・あとは、公開授業がありました。その学校は算数に力を入れていた学校なのですけれども、(中略)公開授業、研究授業、その先生の模擬授業がありました。 ・今年はかなり研修の機会には恵まれています。(中略)教科部会と教科外部会のように必ず2つの部会があって、勉強会のようなこともやっているのですけれども。教科と教科外のほうでも研修がありますし、人権関係のものなど、研修がすごく多いです。

- ・講師が出てやる研修も一緒に入って、意見も平等に出し合っただけという事はやっていません。講師だからこうという意識は僕にもないし、他の先生方にも無いです。(C氏)
- ・その講師全員関係なく全員がやるので、僕も9月に特支ブロックでブロック研をさせてもらって見に来られてという感じです。(D氏)

その一方で、学習機会について、次のような意見も聞かれた。例えば、B氏は、非常勤講師をつとめていた時期の校内研修会への参加について、次のように述べている。

- ・自分らはそういうことはあまり許可なく出ることができないのです。「出ていいですか?」と確認をした時に、「いいですよ」という返事をもらえる時もあれば「いや、今日はちょっと控えてくれるか」ということを言われたりすることもあります。(中

略) 部活動の指導時間までに終わるような会議だと、「出て構わない」と言われるようなことがありました。(B氏)

また、C氏は、講師であるがゆえに、研修を受けることができなかったことについて、以下のように述べている。

- ・講師というのは、特別支援学級を持って研修が受けられないのです。特別支援1年目の先生は研修を受けられるというのがあるのですが、講師はまた別で受けられなかったもので、自分で調べるしかなかったという部分ですね。(C氏)

加えて、D氏は、講師を対象とした研修について、以下のように述べている。

- ・1学期間に2回あって、1回目がひたすらずっと話を聞くというので、2回目が午前中話を聞いて、午後から付属へ行って授業を見ました。(中略)今のところ、話はないですけど、来年も講師なので「来年も講師になっていたらステージ2はあるんじゃない」みたいなことをみんなに言われました。(中略)1回目の研修の内容だって、教授の教職教養みたいな内容で「教育法規の文章にこうあるから、こう教員はせなあかん」みたいな感じの話を延々と聞いて、2回目の研修の時は午前中、授業づくりの指導案の書き方とか、で「授業の発問はどうせないかん」というのを午前中聞いてから、付属へ行って実際に授業を見るという感じでほんとに基礎中の基礎みたいな感じでした。(D氏)

E氏についても、研修機会のなさについて、以下のように述べている。

- ・1年目の去年は、それこそそういった研修に出る機会がほとんどありませんでした。(中略)それから、支援の先生に入ってもらったり、管理職の先生方にもバックアップをしてもらったりとかたちで進めていきましたが、研修という場はなかったです。(E氏)

上記のようなB、C、D、E氏4名の発言からは、各自が置かれている状況は様々であるものの、研修機会およびその内容について、必ずしも十分であるとは捉えられていない様子が確認される。前章においても、非常勤講師が研修機会に恵まれていないという点については言及されており、これらについて何らかの対処が求められることが、改めて確認された。

③大学への期待

大学への期待について、表 3-5 に示したような回答が得られた。B 氏については、教職に就いた卒業生が大学に来ること、そして交流の場が設けられることによる教員志望学生にとってのメリットについては言及がなされたが、それ以外の期待についての言及はなされなかった。教員志望学生にとってのメリットについては、A 氏からも同様の発言がなされている。

表 3-5 において示されているように、大学への期待について言及があった 4 名からは、卒業生と教員志望学生あるいは教員同士が交流する場としての役割を大学に求めることが明らかになった。ここまでに取り上げてきたデータも合わせて考えてみると、日々の課題意識を直接的に解決するための機会としての期待は薄いと言えるだろう。つまり、日々の実践において感じている課題を解決するための手がかりについては、学校内の同僚教師から学び、その上で大学に期待することは、より広いネットワーク構築のための機会の提供あるいは、日常からやや離れた関係性の中での交流であると言えよう。

しかしながら、大学に足を運ぶことについては、一様に、時間の負担についての意見が聞かれた。例えば、以下のような意見である。

- ・立て込んでいる時はありました。地域に入るのは好きなのでそんなに苦にはなっていないですけど、やはりそこで時間を、土日、「これは強制ではないですけど、お願いしますね」と校長先生から言われたりはあるし、ほとんど田舎だったら行事とか

表 3-5 大学への期待

	期待	左記について言及している発言
A	在校生と卒業生が交流する場	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の『OB、OG 会話を聞こう』みたいなあいう企画であれば、自分たちは足が向くかなという感じはありますけど。 ・それ（時間的な余裕のなさ）もありますし、あまりいつまでも大学に行くということもできないのがありますので。 ・（在校生と卒業生が交流する場があれば）「教員になるってどういうことなの？」と、より学生の考え方も厳選されてくるかなという風に思うので、お互いのためにそれはいいのではないかなと自分は思います。(中略) 逆にすごく動いている実習生とかを見たら教員の方も「いかん、これは負けたら。俺らやらんといかん」と思う教員もいると思いますので。
C	自らのことを話すことができる場	<ul style="list-style-type: none"> ・わざわざ場を設けてということになると、やはり誰かの話を聞いたりとか、やはり粛々と流れるので「聞かないかなのかな」「あまり自分のこと話せないのかな」とかも感じますね。で、そういうのを僕はこういう場面だと話しやすいというか。先ほどのラウンドテーブルの中で聞いてくれる人がいて、「話す時間を設けましょう」というなんと

		<p>なく緩やかな感じでやると話せるのかなとは思いますが。でも、実際に日にちとかかぶっていたり、何か校内研とか自分がやらないといけない仕事とかかぶっていたりとかすると「行けるのかな」とかいう部分があります。でも内容的にそういうのがあったら、話しやすかったりするのかなとは思いますが。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の場合は若手が支援員さん1人だし、中学校というのでやはり教科担任から教科ごとにそんなに情報を交流しないのかなという。今は結構いろいろ生徒指導の問題でたくさん職員室の中で話したりはするのですが。その中でわざわざ自分のことをというのはなかなかないので、誰か職場ではないどこかで話を聞いてもらったりとか。それぞれ個人情報なのであれだけれど、聞いてもらったりしたらスツとするとかいうのはありますね。
D	色々な人に話を聞いてもらう場	<ul style="list-style-type: none"> ・話すとなったら電話とか、ラインとか、そういうので話して仲いい同級生、大学の卒業生とやっても結局1対1だから愚痴り合いになるのです。結局愚痴り合いになって、愚痴っている相手がある程度意見を持っていたら「こうやと思うで、俺は」とか言ってくれるけど、意見がなかったら結局「大丈夫やろ」と慰めになって結局話が進んでないということになるので、やはり多面的にいろいろな人に話を聞いてもらったら意見は出てくるので、いろいろな人に聞いてもらうということは意味があるかなと思います。あとは、自分は話したいというのはあるのですが、仕事しててたまるものもあるし、一番下なので「言いたいけど言えない」みたいな。「それちゃうんやない？」と心の中で思っているけど「言えない」ということがあったりするから、でもそういうのを職場以外の所だったら結構考えずに言えるのかな。「言いたいけど言えない」というのが結局愚痴になっているわけ。
E	実践を共有し、意見交流する場	<ul style="list-style-type: none"> ・自分はこの学校のこういう研究でこんなことも勉強した、こんなものがあったとか、そういうことを共有したいです。それこそ、参加しているサークルのことを、また別のサークルで別のサークルに行っている子と意見交流ができると、そういうことはなかなか難しいのですごく勉強になると思います。 ・だから、自分が日々やっていることを、そうではない視点で同じ学校ではない人に話せるといいかと。自分のストレス発散にもなるし、他の人がどのようなことをやっているのか知れるという感じなのですが。

はあるのでそこに行ったりしないといけないので。(中略)部活とか、特に中学校だったら若い先生とかは体育部活とかはあるので、それに土日つぶれたりとかはありますね。それを考えると、特に遠かったりしたら、「うーん」っていう感じもあるのかなと思います。(C氏)

- ・そういう場があったらいいなとは思いますが、やはり仕事で「今日学校行きたいのにな」と思った時に、(中略)市内とは逆方向だから仕事ついでにみたいについでには行けないし、予定があったりもするし。で、たまに「もう今週末は仕事のことを考えんぞ」みたいな時もあったりもするから、あったらあったでうれしいなという感じはしますけど。実際にあった時に「行けるかな」というのはありますね。(D氏)
- ・正直、自分は今の度合いでは全然足りないのもっとやらないといけないと思うのですが、それを大学に求めるのかなというのが1つあります。あとは、大学でそういうことを企画してもらっても、自分は今年余裕があるのですが、たぶん他の担任持っている先生は余裕がないと思うのです。大学で、どうかたちでそういうものを組んでくれるかは分からないのですが、現実問題として時間がないのではないだろうかというのが1番です。(E氏)

④考察

今回の聞き取り調査を通じて、確認されたことは、以下の通りである。

- ・教職に就いてからの課題意識については、彼らが置かれた状況や接している子どもや学校や学級の状態、仕事の内容に影響されるかたちで課題意識が生じている。講師としてつとめている場合については、配属された学校において任された学級や仕事内容に応じて、課題意識が生じている。
- ・上記のような課題意識を解決するにあたっては、学校内の同僚教師との関わりが重要な役割を果たしている。
- ・加えて、いずれの場合においても、校内研修会や同じ教科を担当する同僚教師との話し合いが主たる学習機会として捉えられている。
- ・講師については、状況に違いはあるものの、十分な学習機会に恵まれていない場合もある。
- ・大学への期待については、教職に就いた卒業生と教員志望学生あるいは教員同士の交流の場としての役割が挙げられていた。しかしながら、時間的な余裕のなさや負担が、参加への障壁として言及されていた。

以上をふまえるならば、県内教員就職者への継続的・体系的なフォローアップシステムの構築を目指すにあたり、次のような方向性が考えられる。

- ・学習機会に恵まれていない講師を対象とした研修講座等の開設を構想する。しかしながら、すでに行われている研修との連携・協働等、重複することのなきよう留意する必要がある。
- ・大学への期待のひとつであった教職に就いた卒業生と教員志望学生あるいは教員同士の交流の場の構築という点については、教員養成カリキュラムのさらなる充実という観点からも効果が期待される。また、近年の教師研究では、教師自身が直接的な問題解決に従事するだけでなく、自らの実践を「語る」ことの重要性が指摘されている。それによって、不確実性を特徴とする教職に継続的に従事することを可能にする状態が保たれることが期待される。（語ることの重要性については、後述する福井大学の事例からも確認される。）

以下では、教員養成カリキュラムや卒業生へのフォローアップ等で先進的な取り組みを行っている3大学の事例をもとに、さらなる検討を行う。

（第3章 1、2 島田 希）

3. 先進的事例の収集・調査

（1）福井大学における調査

①日時：平成26年11月19日（水）13～15時

②視察担当者：横山卓・島田希

③視察内容

i. 教員養成カリキュラムにおける特徴的な取り組み（教員養成スタンダードの活用等）

福井大学教育地域科学部において開発されている「教員養成スタンダード」には、学部として共通のスタンダードとコース別のスタンダードの2種類がある。前者については、【A】本学部の教員が共有すべき使命、【B】本学部の学生が目指すべき目標、【C】上記の目標を実現するために学生に保障すべき学習経験、【D】証拠となる学習成果物、【E】学習成果物の評価規準という5つのカテゴリーから構成されている。後者は、同様の5つのカテゴリーについて、各コースに応じた内容が示されている。近年多くの大学等で開発されている細分化、個別化された能力や技能が示されているスタンダードとは異なるという点が、まず特徴的である。

また、同大学教育地域科学部では、教員養成カリキュラムにおいて、「全学年が協働して地域の実践コミュニティに参画しながら省察的に学ぶ」ことが目指されており（福井大学教育地域科学部 2014）、教員養成スタンダードに示された理念を実現するための様々な活動が展開されている。例えば、同大学教育地域科学部における3つの実践コア科目のひとつである「教育実践研究A（各教科・道徳の授業づくりの実習／教職入門、介護等体験、教育実習）」では、「教職実践演習」と連動しながら、1～4年生までの学生が異学年でチームを組み、授業づくり等に関する探究を協働的に繰り返し続けている。

こうした異なる属性の学生等が協働的に探究する取り組みについては、「福井大学教育地域科学部教育実践研究公開クロスセッション」においても展開されている。この取り組みでは、大学生と高校生が5名程度のグループとなり、同大学の学生が取り組んでいることや高校生がこれから取り組もうとしていることなどを話し、深めていくことが目指されている。このような取り組みの背景には、異なる属性をもつ相手に話すことにより、当事者がより一層、その意味を問い直すことが可能になるという考えがある。

加えて、同大学教育地域科学部では、教職実践演習の実施報告書として、『学びの専門職をめざして—教職課程の意味を問い直す学生たち』を発行している。ここでは、4年間を通じて、学生たちが多くの人々と協働的に探究を繰り返してきた様子がおさめられている。また、これを記すにあたって、これまで学生が記してきた学習の個人誌が振り返りの素材として活用されていることが確認される。つまり、協働的な探究とそれを支える個人誌の蓄積が、4年間通じて徹底的に行われている様子が見て取れる。

ii. 教員の養成・採用・研修の一体化にむけた取り組み

上記で取り上げた協働的な探究という点については、福井県における初任者、5年目、10年目教員対象の悉皆研修においても、「クロスセッション」として、同じ構造で実施されている。加えて、教員免許状更新講習においても、新任教頭研修と連動させ、異年代・異校種の教員グループでの学び合いが促進されている。こうした取り組みは、同大学の教職大学院において開催されている「ラウンドテーブル」においても、展開されている。教職大学院でのラウンドテーブルには、修了生も集うとのことで、こうした取り組みは、「自分の成長を支えてくれている感覚」、「(自らの実践について)聞いてくれる人いるという安心感」、「文化的な土壌」に結実されているとのことであった。

また、福井県教育研究所の研修担当指導主事が、同大学教職大学院において、教員研修についての研究を大学院の教員と協働的に繰り返すなど、緊密な連携が行われている点についても確認された。こうした取り組みを通じて、県と大学が協働するとともに、その基盤となる共通理解が築かれている様子をうかがうことができた。

③今後の取り組みへの示唆

まず、福井大学教育地域科学部および同大学教職大学院における取り組みを通じて、教員養成カリキュラムおよび県との連携・協働を貫く理念の構築およびその共通理解を図る必要性を改めて強く認識した。上述のように、福井大学教育地域科学部および同大学教職大学院、福井県における取り組みでは、異学年、異年代、異校種でのチーム、グループでの協働、実戦経験に関する語ることと綴ることが一貫して行われているほか、それを支える理念についての共通理解が強固であった。

教員養成カリキュラムや教員の養成・採用・研修の一体化にむけた取り組みが加速化する中で、改革の方向性を示すとともに、それを進めていく上での基盤となる理念を、大学や県の垣根をこれまで以上に超えて、まさに、協働的に探究することは不可欠であろう。高知大学教育学部および高知県においてこれまでに多く取り組まれてきた改革を

貫く理念を明確化することで、これらがより一層有機的に結びつくことが可能になると思われる。

また、今回の視察を通じて、その方向性として、改めて「省察」の重要性について認識することができた。同時に、語り、綴ることを通じた省察の深化とそれを促すための方法、つまり、教師教育者としての力量を大学教員がより一層高めていくことが必要であろう。こうした点に関しては、学部内でのFDの充実も不可欠である。こうした機会を通じて、目指す方向性について討議を重ね、共通理解を図ることにより、教員の養成・採用・研修の一体化にむけた取り組みを加速させていく必要がある。

(第3章3(1) 島田 希)

(2) 和歌山大学における調査

①日時：平成26年12月5日(金) 15時～17時

②視察担当者：鹿嶋真弓・草場実・島田希

③視察内容

i. 高度化事業を構想、実施するに至る背景

今までは、教員養成を大学が、また、教員になってからの研修は県教育委員会が中心になって行ってきた。この養成と研修がリンクして、互いに補完し合いながら進めていければという考えから、2年間高度化モデル事業を実施。県教育委員会は、初任者研修の在り方を見直してより実効性のあるものをめざし、大学は、県教育委員会と連携を図ることで、大学4年間のカリキュラムや教育実習の在り方を見直す作業を行うこととした。そこで、県教育委員会と大学の連携協議会『ジョイントカレッジ』を設置した。

ii. 高度化事業の実施概要

高度化モデル事業は、「教員免許状修士レベル化に向けた和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会との連携・協働による初任段階の研修の高度化システム開発協議会」(以下「高度化協議会」)が実施する。

・受講生の選定

高度化モデル事業の受講者は、公募により選定された新任教員が、高度化モデル事業協力校に2名ずつ配置された。(今年度の高度化モデル事業協力校は小学校4校、中学校2校、特別支援学校1校)

・高度化モデル事業協力校と大学との関係、役割分担

カンファレンスには、校内カンファレンスと合同カンファレンスの2つがある。カンファレンスのコーディネーターは現場の教師が担う。

合同カンファレンス

合同カンファレンスは、大学で月に一回、実施している。コーディネーターは、外部講師を招き、誰を発表者としてどのような発表させるかなどの準備を行う。合同カンファレンスでは、発表を聞いた後、少人数グループに分かれ、そこに大学の教員を配置し

ディスカッションを行う。さらに大学では、ここで話題になった課題（学級経営や教科教育、生徒指導など）について、大学の教員が2～3時間の枠で、課題解決講座を実施している。

校内カンファレンス

校内カンファレンスは、各高度化モデル事業協力校で週に一回、実施している。各校に新任教員が2名配置されているので、2人の授業を1時間ずつ見学し、その後2時間くらいかけて校内カンファレンスを行う。授業者が客観的に振り返るといのは難しいので、タブレットで授業の様子を動画に撮り、ふり返りを行う。この方法により、省察の仕方を身につけていくことを目指している。自分の授業を振り返って、気づいて、改善すべき点を改善しながら授業に活かしていく力をつけていく事が教師としての自立に繋がっていく。こうした繰り返しの繰り返しにより、学び続ける姿勢が身につくと考えられる。

モバイル端末の活用

授業の様子をタブレットで記録し、合同カンファレンスや校内カンファレンスで提示することで、他の新任教員の様子も見る事ができる。また、SNSを活用することで、横の連携もでき、日々の活動をリアルタイムで見ながら、互いの実践からよりよい授業や取組を学ぶことができる。学び続けるためにも、参加者同士のつながりを大切に、互いに刺激を受けながら、ほしい情報が手に入れられる環境や研修を行う。

③今後の取り組みへの示唆

県教育委員会と大学との連携により、教員養成から教員研修、さらには教員サポートにいたるシステム構築をすることが重要と考えられる。県教育委員会も大学も『学び続ける教師』の育成を目指すという、同じ目標を持つことが大切である。高度化モデル事業を進める上でもっとも重要なことは、県教育委員会と大学とが何をどのように連携するか、十分に話し合い、それぞれの役割を明確にした上で、連携することである。また、複数の役割をつなぐための、キーパーソンとなるコーディネーターの育成も課題の一つである。

日々の活動については、校内メンターが新任教員をサポートしながら、週に一回、校内カンファレンスを行い、課題解決に向け取り組むといった、和歌山県教育委員会と和歌山大学との取組は、ぜひ、取り入れたい方法の一つである。さらに、月に一回、合同カンファレンスを大学で実施できれば、より効果的な活動になると考えられる。

高度化モデル事業により、一度この流れができると、少なくとも次年度には、この取組を経験した教員が先輩として勤務しているので、校内カンファレンスも合同カンファレンスもさらに充実すると考えられる。高知大学では、『学び続ける教師』の育成はもちろん、互いに『学び合う教師』の育成も心がけたい。和歌山大学の教員が、校内カンファレンスで行っている省察の方法は、新任教員の抵抗も和らげ、自らの気づきから行動変容が起こりやすくなると思われるので、実施する上でのヒントにしたい。

学校現場には、すでに校内メンターとして新任教員をサポートしている教員もいるので、今あるリソースを活用することも可能であろう。そこに、高知県教育委員会と高知大学がかかわることで、新任教員だけが『学び続ける教師』『学び合う教師』を目指すのではなく、学校の全教員にも影響を与えられるような研修会が展開できる方法を考えていきたい。

(第3章3(2) 鹿嶋 真弓)

(3) 兵庫教育大学における調査

①日時：平成26年12月18日(木)14時～16時

②視察担当者：草場実・島田希

③視察内容

i. 教職キャリア開発センターについて

まず、国立大学法人兵庫教育大学の教職キャリア開発センター(以下、「本センター」)の概要について説明があった。本センターは、「学び続ける教師(学生が教員・社会人となった後にも、豊かで幅広い人間性を育み、主体的に学ぶ教師)」の育成を目的に、入学から卒業・修了後までを見通した、学生の教職キャリア形成を行っている。本センターは、「就職支援部門」「キャリアデザイン支援部門」「調査研究部門」「ボランティア活動支援部門」の4つの部門から構成されており、約30名のスタッフが配置されている。各部門の共通業務としては、学生の教職キャリア形成のための支援・指導、講座等の企画・立案、関係部署との連絡調整などがある。また、学生の教職キャリア形成を通して、学生の教職キャリア形成に対する教職員の意識の啓発・向上も図っている。

「就職支援部門」の主な業務は、教員採用試験対策と教員採用後支援である。兵庫県に勤務している教員については、部門教員が在籍校を訪問し、職務の状況などについての情報収集を積極的に行っている。「キャリアデザイン部門」の主な業務は、「キャリアデザイン講座」や「アカデミックカフェ」などのプログラムを通して、豊かな人間性の育成や社会人としての基盤づくりを行っている。「キャリアデザイン講座」では、特に社会人としての基礎力(コミュニケーション力、人間関係構築スキル、等々)に焦点化し、養成する講座である。なお、講座の講師には、卒業生・修了生、現職教員、看護師など、社会で活躍されている方を招いている。「アカデミックカフェ」は、院生を中心とした実行委員会が、企画・運営のすべてを行っている。実行委員会は、話を聞きたい教員(講師)と交渉し、教師と受講者が一緒にお茶を飲み、お菓子を食べながらといった雰囲気の中で、双方向でいろいろなことを学ぶことを目指している。終了後は、講座で学んだ事をアンケートや振り返りシートに記入し、CanPassノートに記録する。「調査研究部門」の主な業務は、本センター活動の基盤づくりのために、教職キャリア開発に関する学術的な調査を行っている。調査分析結果に基づいて、学生の教職キャリア開発の在り方や本センターの進むべき方向性について検討しており、本センターのエンジン部分に

相当する。「ボランティア活動支援部門」の主な業務は、スクールサポーター、不登校児童生徒支援、災害復興支援、障害者支援、社会福祉関係支援など、学生ボランティア活動への支援を行っている。以前は、不登校児童生徒支援に特化していたが、現在では多種多様なボランティアを行っている。学生ボランティアスタッフの自発的な取り組みが行われている。なお、調査研究部門においては、ボランティアと教職キャリア形成における効果や機能についての分析も行われている。

ii. 教員養成スタンダードについて

本センターは、学生の教職キャリア形成を行っているが、それは課外での活動として位置づけられている。学生の教職キャリア形成に必要な活動は、正課のカリキュラム(教職科目群、教職キャリア科目群、教育実践・リフレクション支援・専修専門科目群、卒業論文、教職実践演習)である。この本センターの教職キャリア形成と正課のカリキュラムにおける教職キャリア形成の基軸となるものが、「教員養成スタンダード」である。本スタンダードは、大学卒業までに、学生が教師として身に付けておくべき資質・能力の指標を具体的に示したものである。幼稚園版・小学校版・中学校版があり、それぞれに50項目の資質・能力指標が整理されている。そして、正課のカリキュラム(授業科目)が、本スタンダードにおいてどのような資質・能力を身に付けることができるのか、また、本スタンダードにおける資質・能力を身に付けるためには、学生はどの授業科目を履修すればよいのかを示したものが「カリキュラム・マップ」である。学生はCanPassノート(eポートフォリオシステム)に、日々の授業における学習内容や具体的な活動を記録し、本スタンダードに基づく自己評価を行う。また、CanPassノートは、オープンにされているために、学生同士による相互評価を行うことができる。さらには、授業担当教員による指導・アドバイスができるようになってきているため、全学的な指導体制を通して、学生が本スタンダードにおける資質・能力を確実に身に付ける取組をおこなっている。

③今後の取組への示唆

兵庫教育大学への視察を通して強く実感したことは、本学においても、「教員養成スタンダード」のように、正課におけるカリキュラム(授業科目)と課外における活動を統合・整理するための基軸となるものが必要ということである。昨年度は、本学部附属実践センターと高知県教員センターが協働して、「高知県教員スタンダード」を開発した。これは、若年前期(採用から2年まで)、若年後期(3年から5年まで)、10年(6年から10年まで)までに、高知県の教員として身に付けるべき資質・能力指標について具体的に示したものである。本学部が教員養成といった位置づけを鑑みると、例えば、高知県教員スタンダードにおける若年前期の資質・能力指標に基づき、本学部における養成スタンダードを開発することは可能であると考えられる。また、カリキュラムマップは、授業科目と資質・能力指標の関係について明確に整理されているため、学生にとって自身の教職キャリア形成を図るうえで効果的である。今回の大学視察は、担当者自身の教

員養成観が整理されるものでもあった。

(第3章3(3) 草場 実)

4. 全体のまとめ

調査研究Ⅱ「知県教育委員会との連携・協働による県内教員就職者への継続的・体系的なフォローアップシステムの構築に向けた検討」では、県内教員就職者5名に対する調査を行った。加えて、教員の養成・採用・研修の一体化および卒業生へのフォローアップ等に先進的に取り組んでいる3つの大学への視察を行った。以上をふまえ、確認された点は、以下の通りである。

- 1) 学習機会に恵まれていない講師を対象とした研修講座等の開設を構想する。しかしながら、すでに行われている研修との連携・協働等、重複することのなきよう留意する必要がある。
- 2) 大学への期待のひとつであった教職に就いた卒業生と教員志望学生あるいは教員同士の協働的な探究の場の構築に取り組むことは、教員養成カリキュラムおよび現職教育双方にとってのメリットが期待される。
- 3) とりわけ2)を進めていくためには、大学および関係諸機関が協働し、取り組みの基盤となる理念の構築と共有化をより一層進めることが求められる。

上記のうち一部に関しては、すでに取り組みを進めている。例えば、学生支援部会を中心として、県内教員就職者複数名と教員志望学生が交流するための場を設けるなど、取り組みを進めている。こうした取り組みは、教員の養成・採用・研修の一体化をより一層体系的に進めていく際、また、卒業生へのフォローアップと教員養成カリキュラムの改革を連動させていくための取り組みの一步として位置づけ得る。また、今回、県外において教職に就いた卒業生からも収集したが、その中では、独力で問題解決にあたっている様子が確認された。ゆえに、こうした取り組みは、県内のみならず、県外で教職に就いた卒業生にとっても、省察の機会となる可能性がある。

また、高知大学教育学部と高知県教育センターは、平成25年度より、高知県における様々な教育課題の解決にむけた研究プロジェクトを展開していくことを目的として、「高知県教員資質向上研究拠点」を構築し、共同研究を展開している。今後、こうした共同研究を通じて、1)～3)に示した取り組みをより一層推進していく。

(第3章4 島田 希)

【引用・参考文献】

福井大学教育地域科学部 (2014) 『福井大学教育地域科学部教員養成スタンダード』

資 料

- ・ 高知県教員スタンダード（リーフレット）

／発行：高知県教育センター（平成 26 年 3 月）

* 資料については割愛しています。以下からご覧頂けます。

<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/standard.html>

=====

平成 26 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業成果報告書
高知県の教員スタンダードを活用・発展させた教員養成カリキュラムの開発

平成 27 年 3 月発行

発行 高知大学教育学部 (780-8520 高知市曙町 2-5-1)

=====